



標注七部集  
乾





# 標註七部集

清室藏

七部集盛行于世久矣其為書也彰妙於  
言外徵巧於單辭使讀者不倦且悟入其  
奧旨可謂盡矣然鑽厲有年間句棘難解  
未有能心之者或一家妄說或自己憶斷  
區々紛紛至于今吾國有西馬師耽情蕉  
翁學旁涉獵百家西行東遊遂獲七部集  
善本更訂魚魯益諸註遺漏提要鈎玄名  
曰標註七部集稿成將上梓未半病厚臨







心志は 推して 古の遺傳のこゝろ 思ひを 刻本  
ぬめり 字を なるまゝを かり けり 古の遺傳のこゝろ 思ひを 刻本  
備と ころ久き 古人の 遺傳の 解を かり けり  
と云 其の 義の 釋 けり けり 古の遺傳のこゝろ 思ひを 刻本  
標注を かり けり けり 古の遺傳のこゝろ 思ひを 刻本  
古歌名 所地名 昔有 古の遺傳のこゝろ 思ひを 刻本  
事ある 又ハ 原本 昔の 遺傳のこゝろ 思ひを 刻本  
と云 其の 義の 釋 けり けり 古の遺傳のこゝろ 思ひを 刻本  
く 古の 遺傳のこゝろ 思ひを 刻本  
句を かり けり けり 古の遺傳のこゝろ 思ひを 刻本

その 遺傳のこゝろ 思ひを 刻本  
を かり けり けり 古の遺傳のこゝろ 思ひを 刻本  
一詩題の 部原本 と あり けり けり 古の遺傳のこゝろ 思ひを 刻本  
最後の 句を かり けり けり 古の遺傳のこゝろ 思ひを 刻本  
朗詠 あり けり けり 古の遺傳のこゝろ 思ひを 刻本  
の 遺傳のこゝろ 思ひを 刻本  
一 遺傳のこゝろ 思ひを 刻本  
ある けり けり 古の遺傳のこゝろ 思ひを 刻本  
一 引書 文 長き あり けり けり 古の遺傳のこゝろ 思ひを 刻本  
守 けり けり 古の遺傳のこゝろ 思ひを 刻本



一初心の解——可る知白汗をそそぐものありと云ふは古語の流傳  
なきハ強ク加クハ  
一黒糸又ハ校合変異——かきよめるの書きと撰者没後下れハ敢  
て正すは流傳ノ事——此ノ中カク

潜窓ニキ雄述

惺庵西馬述  
潜窓ニキ雄述  
不知庵寄三校



題号ノ説多シトイトモ巻頭ノ句々皆冬季ナリヨツテ冬ノ日ト云カ諸解畧之

途六道ナリ

佐失志説

狂句ニ守後ニ取捨玉トモ、六狂歌無應多リ貞守ノ初年マテハ守余リ作多シ

竹齋ハ山城ノ人尾ノ名古屋ニモ居住ス寛文年間ノ人ナリ

天和三年印本竹齋物語狂歌數多アリサレトフニ據トスヘヤ歌ナシ

此句浮世トイヘト和歌ニ此歌多シ

三麻ノ式トモ云

と云ヘハ此走リ原本濁点アリ

炭俵ニモヤリトモ白トモトモアリ

主水職原抄開書ニ掌泉水

井水又氷室官名ニテ人倫打越ノ論ナシト云

朝鮮芒トイフ一種アリ万葉ニ艶ヲ一ホヒト訓リ

蘇々ヤサハ業平吾事江記ニ業平為生髮到陸奥云云又無名抄一モ出

たへハ堪ニナリ伊勢浮洲又攝津甲村ニモ有云小方ヲ墓印ノ柳ナリ

らんをハ踏蹴

ゆのを日本記明達又山家集ニ

冬歌日

雪も雪連の雪よるあらの歌はハ  
とまりくの山花よもめをい候也  
たる見人系走あをれよ雪ん  
くもむうし狂歌の才士比國長はし  
るを不國おのひ出て中候

狂句あつり 秋もを林高し候るハ  
たきやとららる 笠能山草花  
ら明の雪水と海を流さるるを  
かしら女雪所ゆふ赤雪  
朝鮮のゆりすまの白のなま

芭蕉

野水 荷兮 重五 杜國

ゆのつりくよ哪よ米を刈  
赤雪を流さるるの雪あたりしを  
髪もやすら歌志のふ方の不雪  
ゆりのつりくよと雪を志ゆりすま  
まをぬ率都流しすあくと流  
新法の雪をく大を焼て  
あつりハ雪よたへハ 雪か  
田中たきあちんり極るころ  
雪よよみひく人もちんむの  
美雪城様よちるむ月細く  
臨ゆりしを町ふりり

正平 野水 芭蕉 重五 杜國 雪兮 雪水 杜國 雪兮



あつらふ山さりのハ、トカカク考證  
 アレトモハ俗ニ點シキコトナレド  
 中古カハ及博詞多シ  
 ニのハハ一鴈ニ鴈ト云カ如シ  
 向街ウツハ西行櫻ノ謡ニ也物  
 及ノ余櫻トアリ  
 鼻ニツハ酒ノ詩陳風傳  
 自鼻曰酒  
 熊坂物見ノ松ハ美濃國上野ノ  
 原ニアリ白雲水ハ同國郡上郡  
 宮瀬川ノ邊ニアリ對附ナリ

唐首ハ萬首自萬國來故ニタ  
 家園ニ多ク裁ハ白首ヲ光レリ  
 烏賊ハ古事記万葉水ニ麻ノ  
 肩焼見エタリ唐土ニ龜トナリ西  
 戎ニ羊トナリ其ニ博ク

秋水一斗ハ漏刺云ナリ  
 事苑ニ日東ハ則日本國也  
 石川大山ヲ日東ノ李杜ト云  
 先哲著談及ニ素堂カ詩ナリ  
 五車瑞龍ニ汝陽王進打曲明  
 皇自摘紅槿置進帽上  
 とゆふハ甲ナリ

居湯ハ金ナキ風呂桶ナリ  
 瀬ト讀又瀬トモ云  
 白氏文集ニ月照藤花影上  
 借

二の尼ふと津のむの生りまき  
 標ハむとふことあり鼻一こむ  
 系物子簾透新おろろたむ  
 々た根の矢をををの解  
 盗人の記念めねの吹をゆそ  
 まし〜家祇の名をけ〜水  
 笠ぬき〜堂理もぬき〜水  
 冬枯りけ〜ひ〜一屋首  
 志ら〜と碓〜と人の骨の何  
 烏賊ハえいその國の〜と〜  
 あもれその謎も〜と〜け〜時  
 野水 芭蕉 重玉 芭蕉 杜國 前守 野水 杜國 重玉 野水 野水

秋水一斗漏つくる水  
 日東の李らう坊も月をんて  
 中ノ木槿枝もをむ野打  
 牛の乳とぬ〜ふ草の〜と〜  
 箕ノ鉢の魚を以た〜と〜  
 家ハ〜の〜の〜  
 々〜ハ妹の眉か〜申ふ  
 後比〜居湯〜志願〜を〜  
 庭下〜と〜採の〜つ〜や  
 芭蕉 香々 香々 芭蕉 杜國 前守 野水 杜國 重玉 野水







不破ハクハ美濃ナリ今ハ関ナシ  
古集ニ名所地名ニ多ク對テ附  
リ

傘ハ偽字正字傘ナリ

唐輪カラハ鬪ノ名ナリ

慧照ケイ禪師ノ母ノ面影リ臨濟  
院ノ名ナリ

四部シ祿十牛圖ニちうけり涼山

篠ノ之ノくく指サシハ柳ヤナギノ葉ハささひひ

野水

之ノ隙マタかからんらん 不破ハクノノ扉ヒノノ人ヒト

重五

是ノをノのノ美ミ濃ノノノ打ウつつるる基キをを忘ワるる

芭蕉

福フクささりりノノささもも七ナナ十ジウ

杜國

ななかかめめのの活カツききををままららすすををままららすす

重五

ひひととららのの傘カサのの下シタ傘カサににままららすす

荷兮

草クサ池イケノノ邊ヘののままおおふふ夕ユフ日ヒををままららすす

杜國

おおふふ子コつつくくるる為タメににままららすす

野水

月ツキよよたたるる唐カラ輪リンのの後ノチ比ヒ糸イト柱チウて

荷兮

おおももたたぬぬききぬぬ陰カゲ流リウををままららすす

芭蕉

秋アキ蟬センノノ聲コエををままららすすととままつつるるは

野水

のノ年ネンををままららすすはは一イチ年ネンニニままららすす

秋アキ蟬セン藤フジ實ミニニ句ク一イチ意イナリ

職シヨク原ゲン抄セウ内ナイ侍シ司シ尚シヤウ儀ギノノ人ヒト無ム侍シ史シ

平ヘイ家カ物モノ語ゴ小コ原ゲン御ミ幸キヤウノノ面オモ影カゲ

三サン日ニチのノ花ハナハハ上ウヘニニナナリリ鳥トリ軍イクサハハ關セキ

雞トリ一イチ轉テントト云イハレ

白シロ髮ヘトトモモ白シロ紙カミトトモモ云イハレリリ一イチ本ポンニニ

白シロ雲クモニニ誤アヤル

字典ジエンニニ兩リウ擧キョウ定テイ日ニチ歩ポ一イチ歩ポハハ六ロク尺シツ也ヤ

古コ本ホン重シウ齊サイハハ書ショ指シ和ワ名ナ抄セウニニ靈レイ雨ウ

字ジ典テンニニ小コ雨ウ也ヤ

稻イネ妻メハハ比ヒ前ゼンナナリリ

齒シ飛ヒハハ裏ウラ白シロナナリリ

藤フジのノ葉ハははららふふ葉ハおおつつちちりり

重五

袂タビよりヨリ硯インををひひららきき山ヤマううけけみみ

芭蕉

ひひととららハハ典テン侍シのノ局キウのノ内ナイ侍シのノ

杜國

ニニケケのノ也ヤ 鶯ウ鶯ウ尾ビ長チヤウのノ多タいイくクは

重五

ととららかかここつつををままららすす越エのノ福フク活カツ列レツ

荷兮

杖シヤウををひひくく事コト

僅シカふふ十ジウ歩ポ

杜國

ほほみみのノううききををままららすす日ニチととノノ露ロををままららすす

重五

水ミヅのノ綿ワタつつ流リウ

野水

齒シ飛ヒのノ葉ハ初ハツ狩シヨ人ヒトのノ矢ヤよよ原ハラて

野水



扇ハ扇形ニ編タル具ナリ

勞氣俗ニカハエケナリ

大和物語ニ女あつとくはよき系慕の  
男二人あつとくはよき一あつとくはよ  
又物をおとせむちとせむちとせむち  
ナリ云云一轉ガ畧ニテス

シカラキハ近江ナリ坊ハ邑里ノ名ナ  
リ

雜ニ六雜ナリ

命婦ハ職原抄ニ中膳トナリ又嬪  
人帶五位以上云々

北の所門を押しあけりしを  
 する糞あくる扇よ風のうらみ  
 糸の湯去るし玉野辺の扇よ英  
 らうたけおおむ娘かづをそ  
 灯籠ゆつとみ晴くらりあは  
 露も秋のま撲カ城 撥えられ  
 露もまらさくしき 浪賀樂の坊  
 朝月夜双六 打の秘麻しして  
 ぬを買みゆりよととくさけきく  
 志の少るぢやごとく難をぬりたる  
 命婦のうらより米せんとうまは

芭蕉  
 荷方  
 正平  
 重冬  
 杜國  
 芭蕉  
 野水  
 杜國  
 荷方  
 野水  
 重冬

解ハ釋名ニ以禁作之

洪波

解ハ庖丁スナリ

縣ハ田舎ナリゆるハ総ルナリ花見  
次郎ニ附會ノ説云ハ本旨ニアラシ  
五形ハ碎米薺ナリ蓮花草トモ云  
公事根元ノ御形ハ非ス  
原本ちりナリ一本ちりノ非ナ  
リ

呼出ノヤナリヤニ心ナシカ苗ル  
シカラスコレハ麻キノ裁也

平家物語妹ハ子ハなほおとよ  
そ来よ々此一轉カ

釋惠崇カ詩ニ笠重 吳天雪  
鞋杏 楚地花

ほかき遠津浪の水よりつ穂行  
 佛倉たる、且 解<sup>ホト</sup>きなり  
 縣ゆるむ兄次郎と仰<sup>アラ</sup>の穂て  
 五形<sup>ケン</sup>薺の 畠 六 反  
 うけけよ晴る言をちりくと  
 志の少るぢやごとく難をぬりたる  
 志の少るぢやごとく難をぬりたる  
 志の少るぢやごとく難をぬりたる  
 志の少るぢやごとく難をぬりたる  
 志の少るぢやごとく難をぬりたる  
 志の少るぢやごとく難をぬりたる  
 志の少るぢやごとく難をぬりたる

荷方  
 芭蕉  
 重冬  
 杜國  
 芭蕉  
 野水  
 杜國  
 荷方  
 野水  
 重冬



万治ノ高雄尤名高シ

仇心人ナリ  
南堂ニ寓シテの格を衣フテ  
牙ハ赤キ格ノ一ニシテ底深  
名をニササテ禪ニ依テ禪ノ面  
影ナリ

彈之モ事トモ又借テ佛ノ聲ト  
モ云リテトモトモ後ニレハカリテ  
為スナリ

おもひの心を志をり  
後ヨリハケノ心  
山家集 秋ハハモのよ  
あまのんちのまはりのまはり

一巻中試留二句有各別意ナリ

万葉集 能波人 葦火燒屋之  
酢四手雖有已妻許増常日煩  
必吉 拾遺ニ能波人云々  
礼ナリ

色ニシテ意ナリ  
カニノ意ナリ

職人ノ歌合休對附ナルニ  
鏡磨ノ身ノ貧寒ヲ云分

原本トシテ附カテ  
棘正字ナリ 古本棘ニ偏字

一本秋ニ誤シ織アミクルヲ賣  
スル

微リ古本微ハ書損加茂赤社稻荷  
ノ祭ナリ九月上ノ午日胡麻ヲ供ス

岩倉山城 加茂岩倉對附ナリ

襟ハ高雄ノ袖をせし  
あざんと格を権ニ吞ル  
芥子の心ニ一ハあをさす禪  
之日月の赤ハ暗ク鐘ノ聲  
火照カケテ一ハ琴ノ一ハ老  
高ル事ヲ申テ一ハ魚ヲ救フ  
新トシテ念佛ノ教ヲ受テ  
歌ノ一ハ心ヲ起シ一ハ  
おもひの心ヲ一ハ心ヲ引  
たう花ハ心ヲ一ハ心ヲ入  
この望の目を一ハ心ヲ一ハ

芭蕉  
重玉  
杜園  
芭蕉  
聖水  
社園  
高宇  
聖水  
高宇  
芭蕉

ちよ波津よあし火燒家  
ちよけた種

重五

炭賣のあしあし  
人の膝ひを鏡磨  
を棘る骨の葉ハ咲  
新見る葉ハたか  
風吹ぬ秋ハ日  
秋陰る葉ハ赤  
か茂川也胡麻  
以てその舞ハ

高宇  
聖水  
芭蕉  
西堂  
高宇  
高宇



古本抄誤

山谷カ四休居士ノ詩序ニ三年ニ滿  
過則休三平ニ滿俗ニ於多福  
ナリト云々云々云々ノ畧カ  
とねるハ暖ナリ

本郷江戸ノ地名

古本徳守書ニ三徳誤字ニテ疑  
ノ借字カ又徳カ諸説未詳  
世ノイハレニ依テハ本郷ノイハレ  
中ノイハレニ依テハ本郷ノイハレ  
歎々ハ路ト云ニ本郷ニ用ニ米ト云  
和名抄ニ出禪録ニ口在蘇江海水ト

おもしろ布搦哥コトはわらわら  
うきまきまきとら 城城シロ三平ミヘ  
控らまてくねるコ智チのノ難ナン禮レイ多タ  
火おらぬ火燵ヒツををき人ヒトをを人ヒト  
門カドちチのノあアはハ子コかりカリてテあアるル  
血チ刀ハかくカクまマ月ツキのノまマきキまマ  
旁ナカりリてテ本郷ホンキョウのノ鐘シズメヒヒ川カハきキ  
みミのノいイのノいイのノいイのノいイ  
むムハハ泣ナク撫フのノ徳トクとトすスにニ々々  
借カトトのノいイのノいイのノいイのノいイ  
白シロ蓮レン濁ダクぬヌ水ミヅのノ羽ハをを洗シひヒ

聖水 杜園 羽筆 芭蕉 荷葉 杜園 聖水 芭蕉 羽筆 荷葉

元併存ノ存ト見テ打越飲食ノ難  
ナカレシ諸解未詳

白燕ハクエン云クニ觀ミ水ミヅ通トウ神カミ意イノ附ツケ意イカ  
宜ヨシ旨シメハ勅ツクシ命ノミ 叙シヨハ婦メノ人ノ岐キ守シナリ  
八ハチ十ジュウ歳サイヲ三サン見ミセ七シチ三サン云クニ説セツ可カナ  
ルルニ

朗詠集ニ期許月欲為嫌ノ意旁  
酉陽雜俎ニ月桂鳥百丈ト云リ桂ノ  
花ハ月ノ異名ナリ

本草ニ蘭葉可作膏塗髮ト云リ

はやノ正月云リ

聖書ニ常有紫氣宝劍之精ニ藏ニ  
於天  
南京ヲ付向ノ方ニテ南都ト見  
カヘテ奈良ニ云キ仏達ト云セ聖

宣シらラかカーー古コくク 叙シヨをを綺キるル  
ハ十ジュウ年ネンをを三サンらラ足ツクるル 母ハハ持チてテ  
なナハハいイのノいイのノいイのノいイのノいイ  
西ニ南ミナミノ桂ケイのノまマのノまマのノまマのノまマ  
葉エフのノ油アブハ志シめメ木キノつツきキ  
妙ミョウのノあアハハ賢ケン者シャのノ女メノ見ミてテ之シるル  
釣ツク籠カゴハ粟ムギ成ナリあアらラふフ日ヒ能ノくク花ハナ  
とトやヤりリまマをを持チてテあアらラふフ正テイ月ゲツハ  
教キョウ子シ向ムカるル 芥カイノノ葉エフのノまマ  
宮ミヤのノ日ヒ能ノくク且カをを徹テツ治チのノ熱ネツ起キてテ  
聖セイかカらラふフまマきキ南ナン葉エフのノ地チ

聖水 聖水 芭蕉 荷葉 杜園 聖水 芭蕉 羽筆 荷葉



鶴和名抄或保而巢樹者也  
鶴守典頭無丹頂身似鶴又仲  
鳴則時俯鳴則陰鶴又守鏡布  
あまのたてて下獄ハト共ヒアト悲  
ハト歎クアトト重リテあまの  
云ナリヨクテ熟息ナリキ甚怒ト哀樂ニ  
ワレリ

いづきして産も去ぬ人の像  
泥よりらの清き芥の根  
粥する曉むよか一古はり  
猪心の下小纏ふま丸  
水のうさくたも一層おやうて  
祓ふ能ぬ夢を暮るむとる

若草  
若草  
望水  
芭蕉  
羽筆  
杜園

因家咏望

雲月や鶴のいこたふ山在り  
冬の朝日のあをれちうさう  
櫻松山おの体を木の葉降

若草  
芭蕉  
若草

はつハ物ヲ數フ状ノ詞ナリ  
ナカラニ週フト云ハ非ナリ

取反初ナリ

東海道藤澤山清浄光寺不二見  
ノ真トモ又駿州藤枝ノ鬼岩寺ト  
云  
橋トスル和字ナリセト万葉和名抄ハ  
ニ出  
題林愚抄ニ長采形もろろを成  
ちとのむれいんわんれとあまむら  
系極家隆

山橋号葉ニ數柑子ヲ云コハ八雲御  
抄竟憲深秘抄ホニ世丹ヲ云アリノ  
方ニヤ  
麻川集ハ作名ノミ

ひさぶる牛の塩あられはく  
春もなき具足は月影うらと  
酌する露葉切り下  
秋のまが旅の後を影いかり丹  
漸くも枯て蒲土とやる寺  
寐とて桂のむの暮るる音  
葉は葉ゆふをさむる風の音  
雉追よ鳥帽子結女五三十一  
唐ふ木有能る意の為か  
夏涼き山橋ははくらん  
麻のりといふ哥の集あむ

杜園  
羽筆  
聖水  
芭蕉  
若草  
杜園  
若草  
望水  
芭蕉  
羽筆  
若草  
芭蕉



獨樂庵ハ温公ハ獨樂園ノ轉カ

此間四季四季去ナリ猶考

落梅ノ轉カ

牢興

莊子ニ曳尾於泥中ノ轉カ

水ノ御藥ハ水ノ粉ノ類ノ藥ナリ

和名抄ニ大豆又白角豆ナリ古本  
ハ小角ニテ小豆ニナリ夏ニ冬ヲ附テ  
マシク暑カラシム一奇ト云ヒシ

豎粟 芥子ハ借字

江を近く獨樂庵と世を捨て  
 赤月出よ身をおろるなる  
 物衣留よ身を打拂  
 籠雲中よ瓜の山阿の  
 骨を見ても涙は洞窟うちより  
 乞食の藁をさらふ志の免  
 沈のうしよ尾を咬鯨を捨ひぬ  
 活きよ進むみみくあり  
 殊よ照る年の大角豆をまろし  
 夢醒やむらよ岩を固けく白  
 芥子居の山坊交りよ打むりて  
 芭蕉 社園 相筆 聖水 芭蕉 社園 相筆 聖水 芭蕉

元政深草瑞光寺開山至孝人シ  
所ナリ  
木幡ハ伏見東ナリ鐘ニ花ヲ打ナラ  
スヲ云

秀句ハ巻頭ノ狂句ヲ結フ  
貞徳時代本式ノ俳諧ハ烏帽子大  
紋ニテ出帝セリト木枯ノ身ヲ若ヤ  
キ轉シ山茶花ト笠トナリト  
揚句ニ結テ五巻ニ連環ヲナリ

をるくもすのくたさる蓮の尖  
 去らうけよ飯臺のそく月のあ  
 露おく孤風やかたの  
 釣材よ石松のれたるは底  
 豆腐つらうて母の喪よハ  
 之政の子は袂も破ぬへ  
 伏見木幡の鐘をそりつ  
 色深き男猫ひらね控え子て  
 春のらぬの雪掃をよふ  
 水干を秀句の聲わのやのみ  
 山茶む白ふ笠のあいら  
 芭蕉 社園 相筆 聖水 芭蕉 社園 相筆 聖水 芭蕉



表合、八句又六句ノ中ニ神釋  
戀無常速懷懷旧名所地名亦其  
卷ニ應シテ入ル格ナリ  
茶筌髪謠ノ木賊川ノ面影ヲ旅僧  
ト酒ヲ酌コトモ文中ニアリ  
四句目戀ヲフクノリ

岐阜山濃州ノ地名

天和四甲子年十月改元貞享  
トナル翁年四十一

追加

ひのめんとと籠<sup>ツナギ</sup>西牛をう川霞  
松<sup>トナリ</sup>のあさる 松原の松  
本城<sup>トナリ</sup>川下多よ髪をちねんして  
松<sup>トナリ</sup>のまぢやつす 松原  
銀<sup>トナリ</sup>の松かもしし 月も海  
ひのめんとと松をすのん波庫心  
聖水 芭蕉 杜園 重五 其の号

貞享甲子歳

春の日

暖<sup>ノボ</sup>足むとんその戸<sup>ノボ</sup>あひて熱田  
のうらまゆせぬ<sup>ノボ</sup>渡<sup>ノボ</sup>一<sup>ノボ</sup>舟<sup>ノボ</sup>は  
ちうゆ<sup>ノボ</sup>の<sup>ノボ</sup>舟<sup>ノボ</sup>并<sup>ノボ</sup>松<sup>ノボ</sup>の<sup>ノボ</sup>うらまゆせぬ  
やうらまゆせぬ<sup>ノボ</sup>舟<sup>ノボ</sup>は<sup>ノボ</sup>ちうゆ<sup>ノボ</sup>の<sup>ノボ</sup>舟<sup>ノボ</sup>  
は<sup>ノボ</sup>ちうゆ<sup>ノボ</sup>の<sup>ノボ</sup>舟<sup>ノボ</sup>并<sup>ノボ</sup>松<sup>ノボ</sup>の<sup>ノボ</sup>うらまゆせぬ  
ちうゆ<sup>ノボ</sup>の<sup>ノボ</sup>舟<sup>ノボ</sup>并<sup>ノボ</sup>松<sup>ノボ</sup>の<sup>ノボ</sup>うらまゆせぬ  
出<sup>ノボ</sup>づ

二月十八日

まめくわんをばくの<sup>ノボ</sup>舟<sup>ノボ</sup>並<sup>ノボ</sup>松<sup>ノボ</sup>の<sup>ノボ</sup>うらまゆせぬ  
ちうゆ<sup>ノボ</sup>の<sup>ノボ</sup>舟<sup>ノボ</sup>并<sup>ノボ</sup>松<sup>ノボ</sup>の<sup>ノボ</sup>うらまゆせぬ  
馬<sup>ノボ</sup>ち<sup>ノボ</sup>が<sup>ノボ</sup>く<sup>ノボ</sup>連<sup>ノボ</sup>  
まめ

枕草紙ニ春暎やうくある云  
又和歌ニ春の暎の詠多シ

重五北藤嘉左門名古屋材木町  
久後三宮ノ駅ノ辺ニ開居ス  
白氏文集卷五架三間新草堂  
石階桂柱竹編<sup>トナリ</sup>トアリ

支百良日



霞晴テ山館ニ時ニ顯タル夕月

青葉ノ笛ノ旧淚カ  
異本トバクニテ誤  
文王ノ林ノ詩經大雅周原無  
董茶如餘林之陔陔度之堯堯  
樂ニ登登コノ章ノ意ナリ

古本晨明ノ誤字有晨カ

山雲む月一時ノ館ニ立テ  
 體ヲのら結火ノあまも也  
 夕風ノヤリクノ波ノ酔ナク  
 くらりノ伸ノ岩ニく見ク  
 次ノ寺子汗ノ帷子脱ク  
 おのくちうた笛ヲ裁ク  
 文王結林ノ々々も土傳ノ  
 るノ紫結角ノたまき草ノ  
 似城氣ヲかく人ノ氣福ノ  
 旁拂ふ鏡ノ人ノ氣福ノ

雨相 李丸 昌圭 執事 重子 芳子 李桃 雨相 昌圭 雨相

和名抄ニ雜和

梓巫ナリ

サゲ尼ナリ統世繼ニ由ル  
サゲニナリ  
掛原ナリ針共鍼医ナリ  
職原抄ニ針博士位下典藥頭  
ニ准シテ五位カ

徒跣

日ぬくとのこ流樂かく里  
 多る在りノ半色奥ノ砂行テ  
 むノ世男結孤者あづる  
 柳ノ上を陰ぞわらノ鞠ヲきや  
 入らるるりノ梓ノくちり  
 うつこのとを友をふるあま連結テ  
 息懐平ノ梓ノき、おれ  
 思髪我衣をぬるおん切結  
 世もかノあき五位ノ針立  
 松ノ木ノさき司ノ門ノあきて  
 をたノゆもアをさぬ時多そ

重子 昌圭 雨相 李丸 昌圭 雨相 昌圭 雨相 昌圭 雨相



朝熊伊勢より朝熊林下三行  
谷より異本より句誤焉甚し

芋洗ふ女おのりぢり八哥トナシ  
号ヲ連句トナシヤ

平家物語小督ノ局トト面影  
尤シ

朝熊 豆府内成童ふとくは  
急 併 一 之 げ 一 社 あり ね 之  
種 養 生 不 物 之 住 じ 住 せ じ  
赤 名 之 橋 の 名 小 呼 有 月  
傘 の 内 之 付 又 なる 雨 の 降 じ  
朝 熊 下 之 出 家 ぼ ぐ ぐ  
お ち ぎ 之 西 行 なる 八 哥 讀 ん  
釣 瓶 ひ じ ら 哉 二 个 之 目 け  
世 又 あり ぬ 局 深 下 年 之 目 け  
記 急 一 之 ぎ 不 晴 味 の 首 相  
い く 妻 之 む 竹 と 小 さい 之 ぐ ぐ

昌吉  
李丸  
重吉  
為吉  
李丸  
菊相  
菊吉  
菊相  
菊吉  
菊相

才も足も多しうりよゆぐ

李丸

三月六日野水言うて

旦暮

おち板や細うつ山のいさけくら  
おち一あり 雲むかぐぐの鐘  
妻の物言供あるらん 袴着て  
口まぐと一き清水をのり 海へ  
松風よちあまぬむの海の碓  
赤雲 一 たる 虫 を せ づ 月  
笠 向 きて 素 染 る じ 乃 乃 乃  
為 来 あり 地 よ ぶ る 見 てる かく

聖水  
菊吉  
羽吉  
執事  
聖水  
旦暮

本良坂を良北へ合般若路  
くらギナリ

節供の節句ノ古字ナリ  
節十六ナリ

はまぐくハカリニテ清水ヲ雜ニテガ  
ニミナリ

九月十二日山城葛野郡太秦ナリ  
祭文奇ナリ



法華ノニ車一乗心カ

鱈又大口魚

一本蚊ヤリト誤ル

千日万日ノ回向ナト云フハ寛文  
年間ヨリ始ルナリ

和名抄ニ鮎

筑紫人ノ浴衣伊勢人ノ帯ナト  
東西ノ國ヨリ入来ルヲ云リ

表町出づて二人發別ん  
 曉心うみ車ゆくすぢら  
 鯉原て大津の原よのそり  
 何やら少ん糸國の聲  
 旅をあたふ年より松板をりて  
 萩少こたふすり 万日の糸  
 里人よ薦を施は秋める  
 月ちつき浪よまほく橋  
 しろむちる木の松よむの鮎とらむ  
 汎ひあせむる春の湯の山  
 のとらむ 筑紫の袂仔務の帯

越人 有字 旦葉 越人 羽笠 聖水 越人 羽笠 聖水 越人 有字

唐三十眉ノ苗アリ和ハ又異ニシ  
テクサノマリ且事物紀原ニ見  
エタリ

攝栗ヲ勝衆ト祝語ニヒシナリ

麦の粉ハコカシナリ

千鶴阿闍梨ノ住玉ヲ攝津金

龍寺ノ面影カ

魂祭ハ報恩祭ニ月十五日五月全  
七月全九月全十二月全晦旦ナリ

肉侍のえらふ代々の眉如図  
 物思ふ軍の巾をば編小  
 名もうち栗と命ナトとケ  
 大年ハ念佛唱すえあす柳  
 そのおとをふよき障 乙  
 朝夕の若葉のためは枸杞うき  
 都よ 廿日をやを麦の粉  
 一扱かる言ハ言かあ寺なれや  
 あを魂やうらるき法なき能身  
 陽炎りも元跡ノたる史婦よこ  
 春の袖小は奇いたくく

有字 羽笠 聖水 越人 有字 越人 羽笠 聖水 越人 有字



興卷月四出夕三句短句ニテ  
長句ニ廿九日ノ月ヲ出セル一奇ト  
云ハシ

且葉カ家ニ贈答ナリ  
レタレト云

田を拵てむ見る里は生れたり  
力の節を法より申一の子  
漣や三井の末ちの徳よりよ  
高びくくのこぞ雪の如く  
足つげたり世々の月空き  
君のたもめみ氷ゆえにけ  
羽豆

二月十九日且葉の田あふとて  
桂のこすてゆくも森見哉 野水  
額にあたるまゝのこり  
蕨煮る岩木の真高うて  
城人

渡  
磯  
音句格

錠  
ウナハ借字ノミ万葉ニ錠カ  
カカ正シ

檀木堂ニテ十二句ノ後ヲ継リ

まどく人を見ざるもの子  
立ての渡りのみの月影なり  
芦の種を招る傘の端  
磯際よ施餘鬼の偈の集りて  
岩の百より花見ゆる 野水  
雨の日も瓶焼やうし煙たつ  
ひだるき事も旅のいらふみ  
尋よも坊主を信守 野水  
解り如おむむ枝むすふ松  
冬文

と雪は交たりとてやいぬ  
月十九日岩高字室うて











きのふ子ノ日乃ふ丑の日ナラ  
云ナリ

古池の吟ハ貞亨三年ノ作ニテ  
是ヨリ正風ノ姿情定リ王ヲカ

教トカナリ天ノ生ヲカ  
コトナリ云ニ因リナリ

夕ふとももぬねらし牛ノ夕  
朝白二分柳の動く白の暮  
空のて野のまひくもと霞の空  
芥指ととあけて海なき瓢水  
のうれも人の許のあそ  
兒のし程はる壁のや——夕露  
古池や蛙飛あむ水の音  
傘張の睡りた露のやとりの水  
山やむ垣松くの海をや——  
あま理れて夢たりとて死てうれ

老野吟

猿雪  
若字  
同  
且葉  
城人  
芭蕉  
孝子  
龜洞  
城人

撰集抄 信濃國佐野  
正徳——タリヨマキ人のあつた  
正徳のあつたヨマキ

待ツケ子夏夜モ長シキ由ナリ

三才國會登古宇島トナリカ  
島今ノ湖古島ナリカトナリ

是のこは様を曲る庵やとつ  
松籠寺かろ程ぬまの松水  
板木やとて様のまをそ承めぬ  
錢お  
孫のまをたつふのこつ  
山畑の草掃をわすす夕々水  
板ひららよ木下ぬね松まのま  
夏  
おとくきんその山々の尾を長し  
おとくきんその山々の尾を長し  
かつおを板屋の首戸の一里塚

松園  
孝子  
若字  
城人  
城人  
九白  
孝和  
越人







山家集卷中「よ時く雪のかり  
とそ月とまてをまかざりあり  
たれ

異本二具三馬とトリ誤寫あり

麴黍ハ玉蜀黍ノ音便ナリ

層きえ又一寐入すも中夜

を柳一人を休む月をその

ふちと木橋をその月夜東

瓦ふく家も向のや秋の月

ハ島をうけの屏風の陰をうて

具足なきて歌のこをう月を船

結意

東ぬ殿を唐黍亭とあらしむ

閑居増意

秋をうり翠樹をうり世をう海ぬ松外

ねうねハ末一つん二来こせり

白桐

芭蕉

哉人

望水

月

若手

月

舟名

若

馬とぬ牛とウツの村一れ

芭蕉の意を高くしりて

雲字をき旅病を板屋を忘やす

雪の糸舞の子れ落の那

る哉まへをうむるさうあま外

り灯の煙けぞさきさきつくれ

芭蕉の意を高くしりて

試みの氷をうり名跡外

隠をよかりなる意を高くしりて

あたらしき糸袋一つをうり

杜園

大坂位  
如行

呂碧

芭蕉

哉人

杜園

若手

薄ノ雪ノハカキ姿ハ牽牛花ニ次  
意ニヤ

名残ハ正字餘波左傳ニ出  
本義ハ離別ノ事ニアラス轉用ナリ







糸遊吉言空木綿ナリ  
朗詠集ニ表されしものその  
のちかくてあまのつやまのよめあ  
らふといふ

山家集に花なきはゆきあはれ  
姫百合の何よつくともあはれ  
くろくろの

野守の荷分ヨサナリ  
へらへららの本語ニなれり  
サキト察シ名詞ナリ自ノ詞ニ  
名つらまのなつらナリト今世  
多シカス誤ナリ

あまのつやまのよめあはれ  
のいとこのすあはれもんの  
なきかよたよりて。姫ゆりの何よも  
つりた。まを存のちまよを水澄て、  
世系の手もすうなると。よこせおん  
志る。ふるまんと。比那の糸の野守を  
なげらるるら

元禄二年流生 芭蕉祝春

荒野

万葉ニ荒山荒野ト見エタリ  
荒生ニテ人氣ニ疎キ云  
巻首ニ荒野ト標シ卷之二ヨリハ  
荒野ニ作ル  
曠空也又疎曠也

荒野集目録

- 卷之一 花郭公月雪
- 卷之二 歳旦 初春 仲春 暮春
- 卷之三 初夏 仲夏 暮夏
- 卷之四 初秋 仲秋 暮秋
- 卷之五 初冬 仲冬 歳暮
- 卷之六 雜
- 卷之七 名所旅 述懷 戀 無常
- 卷之八 釋教 神祇 祝
- 負外



貞宮、延宝九年二月七日卒

曠野集卷之一

花三十句

よりのふて

小籠をくくさるかりむの芳野山  
 赤やうをいさするむのあき——外  
 落らむり葉たのく花の林の形  
 土ぬの山登あたらはつて歌よを舞  
 管流——むの及吹鬼一丸  
 山登よ喰ものさるるもんう形  
 何るそむ見る人の長刀  
 うまのあさすあ——むもはるう下  
 貞宮 信徳 晨風 友五 高白 左耳 聖水

堀川百首色すのふまふのそや  
交さらんこらさるるの四六  
の山女端

宗鑑譜州琴弾山ノ辺ニ住ス夜  
庵ト号シテ狂歌ヲヨメリ  
上ハ本を舟ハ舟てなんトハ一歌  
一花とすハハハの下り也

忌ミ又禁忌

一本おろし作原本おろしナリ  
おろしノ假名ノ誤カ

むの中下下下とあるかむな成  
 下への下好まるとせんむのう  
 むの山常おろす枝もなし  
 見とく——あやとまきうぬむの滝  
 見身のいろはあけきりむの時  
 ちるむと海ぬすんちり  
 冷げよ敷てもうむの陰  
 ちるむと海ぬすんちり  
 紫赤のむ候まきり骨のる  
 あ町まきりて遊るむむ枝  
 まさるやほ身ハあう——むの時  
 龜洞 一井 後似 藤弾 舟名 胡及 長虹 津路 一枝 崎守 為号



疆

偷安浴云云キナ也

和名抄ニ柿林ニ同

絶俗ニ然喜式和名抄ニ出

疱瘡の泣かき足ゆるむ免束  
 あふけちや風車賣むの時  
 ちよまきとく津くくく或あら成  
 山あいのむをうりはよんぞたり  
 おもくちや理産まきよまむのぞ  
 ちうちんやちむうり能物まう能  
 福来と友選むりりむの山  
 ちをるとあたら音ある屋上式  
 そぞくくまのむんよ能や  
 酒のこ居る人の院み  
 月もちうくと酒のむひりり或  
 傘下  
 為道  
 たつ  
 心苗  
 越人  
 野水  
 冬松  
 冬文  
 冬子  
 芭蕉

二十句トアレトモ十九句ナリ落  
句アルニヤ可惜

延宝六年ノ新道集鎌倉にて  
ト云云アリ

ある人の山あふいりりて  
 檀の木のむよかきをぬすりく成  
 杜宇二十句  
 時をを飼あくものよあはてぬやち時よ  
 ちよ龍の目目又つらむ中くきん  
 目よいま茶山むをん初うはを  
 いちりりしを中ま少りりし留魂  
 権幅の光りよりやちをきん  
 原一子のちち終すちや時を  
 海や先々采のはく壁迎のほと  
 海もよんぶねちうらきうむ甲の廣と  
 津島  
 松下  
 磯人  
 冬子  
 柳風



拾遺集のつらきものあり  
んぢり、まの涙のあはれ  
すゝ粒よりさふ忠見

ある人の許しを登司せんとすは  
わらきんたかひもなき鳥の鳴  
鳴きもなき鳴りやなきをきし  
歌原鼻きき採花のうらや時を  
之中なり中を泣のさうや郭の  
渡りもす

わらきんたかひもなきを採花の  
鳴きもなき鳴りやなきをきし  
歌原鼻きき採花のうらや時を  
之中なり中を泣のさうや郭の

風鳥  
古雨  
傘の  
日  
鈍可

心くきニテ殊サラ褒詞す  
俯臥

気疎

たかあり何事の月影射れこと  
吹らけりいふ

寄かきくもなき人のまはれをき  
うらうらうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうらうら

月三句

かきくもなき人のまはれをき  
うらうらうらうらうらうらうら  
うらうらうらうらうらうらうら

十二歳  
梅舌  
湍水  
一管  
越人  
昌黎



観音便大意

續古今集月三十一日  
おとよみの月のとさきの月を  
る月をあらふ  
かゝ櫛ナリ

登りてうねる海にや月の影  
 をかけよ海を渡る月影をよ  
 とこちへもをる月の中  
 味近視抱きて月見一の那  
 ひららあやいあはるる月の力  
 名月を歌ゆらもはさきうらり  
 名月やうよ十二をみるころ  
 名月やかた実たうはなく舟  
 名月やはげうとあうくまの中  
 名月や鼓の音と大の了忍  
 なるものよをえそ人の月見は

津島  
市柳  
一更  
長虹  
任地  
龜洞  
裁人  
文解  
昌若  
筆下  
二水  
燈水

名月乃心のまじり

あつくと月をみるはたまは  
 みの月もあををよめて名  
 名月や海もおもはれぬも  
 名月や下をよめてあつと  
 名月をあらふもあはれぬ  
 音もあはれぬもあはれぬ  
 十三夜  
 名月をあらふもあはれぬ  
 名月をあらふもあはれぬ

名月  
同  
吉原  
調及  
釣音  
一更  
杉屋  
名月  
名月

十三夜ノ月ヲ賞スルハ宇多帝  
ノ御時ヨリ始明月無双之由被柳  
出中右記ナリ



新月似磨鎌又玉鉤彎月ト  
皆月見立ナリ

二日 足る人もあまき月の夕ニ  
全

三日 何もの足なきも如く月の  
芭蕉

四日 夕月夜打打りて志を  
ト枝

五日 何日ともやういぬかや雪の月  
一  
何詩

六日 新河又雪ふは日  
雪の  
新河

七日

結ぶとれたを新の月夜来  
岐阜  
歌

雪二十句

大津より

雪の口や新雪の 顔の色  
其角

いさゆのむ雪んまろふ新やそ  
芭蕉

外之雪を寝て抱るをく桂の  
蓬交

かきまもや雪のあま山只の山  
京  
加生

車道二雪をきくをのあま  
加賀  
小春

まろ雪をかくてうら顔を洗ひ  
哉人

けら雪よ戸ぬぬるまの底に  
是幸

ものうけのぬらぬま雪のひらけ  
松芳

自然居士諱三郎以後の山歌の  
つらまうてい  
とささるるを再案アリ

加生九兆ノ初名ナリ



押 燈 下

泡雪 景 記 沫雪 其 弱 如 氷 沫  
淡ハタカヘリ

とらきおよ物陰 足らり 雪の隈 二水  
 雪よりて雪をまきひる 蒼一水  
 花の雪おとさぬやうに枝おらん 鳥仙  
 雪の日也川節をさうり 不毛く 崎阜  
 まつ雪やおしりまきる多の奇 露下  
 雪の江の舟より小舟か 芳川  
 雪の物 軋 離 くる 雪 冬文  
 雪の雪 軋 さやうや 磨の 桂夕  
 ちりくくや泡雪かき 酒 強 飯 考号  
 まる雪や先雪 履 くる 隣 中を 詠通  
 はのられ 雪の足 不 あり とも 移 望水

みかげくやくも海の雪 芳川

荒野集卷之二

歳旦

二日よもぬりくをせしな 木の末 芭蕉  
 多れ人の色くくかじし 花 古林  
 わの水や凡子年の津より 風 吟  
 松よりり 伊勢く家 閑人 其 角  
 歌う 雪 在 奇 中 あり 春 文 解  
 月雪の女めよも 志 門の松 吉 来  
 かきり 本 小 なら 年 みる 柏 外 一 日 明  
 元 朝 何 と 年 なる 年 みる 柏 外 詠 通

三草紙  
えりるまて 外て 咲 足 全 あり  
たむ 初 ち あり 又 いた 一 草 紙  
1も こと ころ け ー ー ー ト 云

古今集 伊勢 志 巻 へ あり  
阿比 川 淵 一 あり 飯 多 巻 へ  
中 階 あり あり あり あり あり あり  
蝶 新 年 酒 肴 ト ナ 和 名 抄 二  
小 草 紙

和名抄 二 撮 又 柏  
古 哥 二 行 くる くる 一 草 紙 あり  
あり あり あり あり あり あり







コノ我浮テ聞ニ初華心スシ

大服、点茶ノ名ナリ其式点茶  
或清塩梅椒ヲ茗碗之内而  
合家飲之

胴膨

堅魚ハ祝語也古本賢ハ

書損カ

濱名ノ橋ハ遠江國元慶八年始

架之長サ九拾六丈有ニト云中古

ヨリ絶其後猶地震螺核災アリ

賜ヤ賤ナリ 麦厚ニ田舎ニテ

閑 ころな

あひくふねをきり門もおもらや

松丸

大服も去年の暮はまの白のいな

防川

菅の聲 少中おれ年 男

昌勝

傘子 菫菜かりりり元方柳

夕道

袖をりてねの葉繁るる物のみ

梅古

たぐくんむるやうらう大かこ

野水

暖く美の初めやどうぞまら

同

さつ 春のふたたまき名之怪魚

越人

初夢や淡名のかげのそとのと

同

まづやまは海踏よりふの麦厚し

号号

鎮守參詣ニ捧ニ麦ナラシ

巳の年ハ元禄二年撰集年也

万葉の言を解りしものなり

司

己のくもむらりの妻のおもつれ

同

ふらふら目くふまらるる毛こま

服齋

あふたり宿まもすまらやと

欠き

初春

いふ葉つむ初も本を割 畑 こま

誠人

精出て指ももえぬいふ葉も春

野水

七とさをたききたうて泣子

俊似

女出て寝たらあとのいふ葉も春

小春

側濡て袂のまき 磯葉 成

藤羅

吾もも踏しとおのぬいふ葉も

素秋

岐阜

加賀

津島







膝より紙の行くをわめり枝 菊字

當座題

こー木

法事くつりと四人のぬきかき木外 舟名

接木

つやうか下かきーいひきき 陸種外 傘下

核

咲の菊紙よまのう 法事きこく木 菊字

数少く蝶を糸のほのぬ核の糸 卜枝

まを

望一ハ伊勢神路山禁ニ住レ守  
武ノ風ヲ慕フ慶安頃ノ人  
紙拾ノ音便ノり也

白尾ハ繼尾ノ雅鳥ナリ

菊目相似る句ハ集まらず  
こゝろ一雨ハ置ゆれん

まもるハいせの望一うさうし 湯水

目

まのる才まをを呼てこよ 菊彈

白尾齋

まゆきの尾つまけら白尾外 水

蝶の團まをを白うらう 菊一うり 菊生

立白うらま州 足たる明 舟名

すこくを教を指まはし 其角

すくくを案の子の毛をう 芭蕉

土橙や横よそえきまはし 燈車



川舟やまのそはむつりし  
はくしーひやまたまひんり

蘭亭主人六王羲之云晉ノ時  
人ナリ

蘭亭の主人此より鶴を

やまをひらきーわきまをひらき

此は鶴なり一假名書多ふ柳陰  
凡の吹かこを波のやまきこれ  
何ともちりーとさりー柳ーのふ  
きー柳たあふも柳ーのふ  
尺をかりけやたさみぬる柳  
すかぬー柳と風まそつらん  
さうつきて後をさむる柳

絶  
ふ  
し

さく松も幾のゆらぬ柳来  
みーりくて地まのころ柳ー  
ふく風と牛のふきをむく柳  
吹風と鷹かよりさるやまこ来  
風あうぬ日をやうさりの柳  
いそらーき野渡治を志ふぬ柳  
柳幅うみそらー月の柳ー  
ま柳まもたれを通る車外  
引いきよはへこらふ柳ー  
葉の名も志をたれも極なり

仲春

杏雨 此柳 杏雨 松芳 校慈 若今 全 暮秋 鷗子 生林



夏の菜は菜のちかたつ山登り  
 菜の花や杉菜のまきのあひりよ  
 花のちの産物ぬまうつる口影  
 菜の花は畦うち新葉ちうめ  
 うさくとも尺を細うつ林蔵  
 万葉をば舞てうさくま由外  
 橋やちおきくらうさくま  
 廣原よ一本橋さくくうぬ  
 まきんら葉干さくくうぬ  
 ちのちくくくくくくくくく  
 うさくくくくくくくくく

不悔  
 長虹  
 傘下  
 清洞  
 去来  
 昌黎  
 誠人  
 笑州  
 陸奥  
 一橋  
 老松

アノミキ  
仰向ナリ

つらハ面ナリ

女院ノ御車ノ前ニチノ吟ナリト  
云リ

古本不聞ト縣ニ作書損也

ずらーと山や香らん手さくく  
 まんま力くく婦くくち在くく  
 あふれまきまきまきん聖辺のまき外  
 高きくくつらまきまきまき  
 けくまきまきまきまきまき  
 手をついてまきまきまき  
 啼くまきまきまきまきまき  
 あうつまきまきまきまき  
 いくまきまきまきまきまき  
 花大くまきまきまきまき  
 不圖死て後くまきまきまき

一袋  
 聖水  
 除丸  
 一言  
 塩車  
 山崎  
 宇鑑  
 落極  
 誠人  
 去来  
 首極  
 津島  
 松下







山崎山蠶ナリ

燕の巣を破りて雀の如く  
 羨望よたてしをねらふ燕のま  
 友減て啼きあはれや花の宿  
 角落くやたぐも又申る小忌  
 ちり清く秋よふ浦の汐干介  
 歌も子も同し飲人や枕の酒  
 人愛む舟と侍との汐干を  
 山崎ゆふも候うぬる躑躅外  
 縦ねやちりくそまをそ藤のむ  
 舟大し藤のすけぬ物舟ぬ  
 永き口や待撞ぬもくぬぬ  
 長虹  
 風涼  
 旦暮  
 越人  
 傘入  
 友重  
 舟子  
 魚心  
 龜洞  
 ト枝

練鰻魚醬ナリ

肖柏号牡丹花三愛トテ香酒  
茶ヲ嗜メリ宗祇門人ナリ大永  
七年没年八十五

永き口や油一め本のよむる香  
 りきのあき塩うを破りたり  
 野水  
 同

初夏

こゝもかくやらさく物よもろん  
 天衣襟もさくはたかくそん  
 あらもろんもさくはたかくそん  
 肖柏号人あちたやひ一虎山と  
 いふ香をるのほきをむる文隣うれ  
 ちりそ香のあち越人かおん  
 ときをかくくぬらぬる葉の文隣

路通  
 傘入  
 嵐路



宗祇法師ハ鬘ニ香ヲタキコメ  
シト云

石草貞享五秋葉山ノ吟ナリ  
笈日記ニ一葉の一葉シトアリ  
和名抄蒙草又燕子花

コヤつらり  
鬘ノ焼香もある  
山路あり

夏草もたもた  
一井

切かぶつ  
越人

さけむ  
不交

ゆらゆら  
龜洞

ゆらゆら  
竹洞

こけ山や  
夢

上ヶお  
玄察

枯色ハ  
生林

麦刈て  
不知

麦か  
鈍可

鳥籠  
崑蘭

大粒  
李桃

ぬた  
東巡

深川の庵あり  
吉次

句集 芭蕉庵



尾のねもみーくくねねきーて  
きいーきのきくえんえんからきき  
燈水

仲夏

宵のちを管ふくくくくくくくく  
刈子のる屋よええええええええ  
重々々々障子のあははははははは  
園きようくきんんんんんんんん  
乃細く道をぬぬぬぬぬぬぬぬ  
るのねを下をるりりりりりりり  
子刈の袖よりさるるるるるるる  
水波て深くくくくくくくくくく  
元補  
一髪  
不交  
風笛  
喜江  
合占  
卜枝  
鷗歩

兼の鹿集ニ録しきと兼集ニみ  
ふくく学外まふの基佐より宗  
祇同時ノ連歌師ナリ

拾遺集ふきよりくくくく  
ちみそ入ぬくくくくかよ照  
せよお端の目 和泉式部

柳ハハ膠す

畫寐トキノ作支ニ見及ス

くくくくくくくくくくくくく

あくらりと暖く菖蒲の軒端に  
枚のむねを柳の一本の是よりり  
枚巻火よふ様ふをくくくくく  
るの暮傘のくくくくくくく  
枚の應て鑑のくくくくくく  
深のむをかたげる葉の髪  
汐引て岸のむをくくくくく  
是れつて娘のむをくくくく  
竹のよよの燈をけて回よりり  
葉の時よりまきー弓の休  
秋芳  
小喜  
杏雨  
二水  
一笑  
朋及  
児竹  
此橋  
長虹  
玄来



汀ハ水際平砂也

貞室十卷余ノ集ニ此句見エス  
ミテ酒語諸説紛々未詳

関を水たたくてもちき水跡水

五月るよ柳きとやふ汀うま

五月るよ柳きとやふ汀うま

五月るよ柳きとやふ汀うま

岐阜よて

おさしりうさししきとや

おさしりうさししきとや

おさしりうさししきとや

おさしりうさししきとや

おさしりうさししきとや

曰

野水

一龍

尚ら

龍洞

貞室

芭蕉

看字

和名抄二標

万葉ニ有リ有枕草紙ニ繪  
枕草紙ニ有リ有枕草紙ニ繪  
申すなまの何らう三四月のお梅  
のなぬナトイハル文也カ

おさしりうさししきとや

おさしりうさししきとや

おさしりうさししきとや

おさしりうさししきとや

おさしりうさししきとや

おさしりうさししきとや

おさしりうさししきとや

おさしりうさししきとや

おさしりうさししきとや

おさしりうさししきとや

庵の宿まき

越人

淳児

梅餅

路通

ト枝

鈍可

同

越人

藤巻

旦暮



無名抄二火ふこまぬ夜のまは  
つしの地へてんもささるの夜を  
ささるの夜を  
夕良や林の吟十鳥掛集六  
初秋中ノ百此はとむちてト詞  
秀ヤリ伊達衣むつ十鳥去今  
抄泊船集ニモ秋ノ部ニ出タリ

和名抄二櫛又櫂樟

文正もすれど云言カケナリ

まぶはるるまぶさふ夜のはる俵  
夕良や林の吟十鳥掛集六  
夕良の志むむも人の志ふぬ之  
夕良の志むむも人の志ふぬ之  
山波来て夕良足るる津中か  
名をるるは夕良よ覚るや

暮夏

櫛も動くやうし櫂の音  
その音櫂くけはたむむなり  
夕良よ平入舞ぬるる地種りぬ  
津に板もやうぬ木陰の音

涼一さよらるるやうら入白新  
籠一と涼やおのそむいし口  
おもしろいの人よなをり夕涼と  
飛石の石就やまの夕涼み  
津一さや櫂の下ゆく水の音  
桃灯のまやゆゆく一涼と舟  
津一さをやまねてくる川辺水  
吹ちゆく水のとゆく暮一の那  
蓮見むやふさうやまをやくこも  
笠をさるるみちく暮よ暮またり

玄来 同 如 俊 全 卜 末 秀 正 晨 風 古 梵















関孫二兼行、永和中志津三郎  
兼氏、元應頃名譽、刀工ナリ  
美濃多藝郡ニ住ス

坊ニ喜藏院南陽院ト書帯ノ  
寺アリ

穀杯、多陰ヲ見セハヤシ

さそ 砥孫ら屋、も志津、を女  
其角  
より、形、ふ々

きぬ、く、ち、か、ま、か、ぞ、ま、坊、ふ、ま  
芭蕉  
一、笑

な、み、く、く、林、り、葉、の、ら、き、み  
巴丈

ま、く、葉、の、ち、ぬ、そ、あ、り、は、を、き、き  
昌岩

山、夜、の、ま、く、聖、葉、も、又、ち、の、ひ、り、り  
越人

一、ま、や、作、ふ、ぬ、葉、の、ま、さ、り、り  
曉龜

か、ま、ら、け、の、み、ま、ま、と、ん、き、ま、や、葉、の、ま  
其角

鬢、帽子、鉢、卷、ナ、公、卿、召、子  
フ、物、ト、云、ハ、非、ナ、五、元、集、續、猿  
蓑、ニ、ハ、朝、衣、ト、云、ナ、人、ヤ、ト、リ  
平、丸、三

そ、が、ゆ、ら、い、端、絶、ト、リ、此、句、端、書、ニ  
風、声、ハ、天、地、の、語、ク、ら、め、る、を、ト、リ

三、井、寺、ノ、謠、ニ、ま、ら、ふ、へ、く、一、巻  
ら、ま、ら、ふ、ま、ら、ふ、ま、ら、ふ

米、の、高、満、る、人、や、鬢、帽、子  
同

は、ま、ら、け、の、み、ま、ま、と、ん、き、ま、や、葉、の、ま  
二、水

か、ま、ら、け、の、み、ま、ま、と、ん、き、ま、や、葉、の、ま  
伊豫

か、ま、ら、け、の、み、ま、ま、と、ん、き、ま、や、葉、の、ま  
千、岡

か、ま、ら、け、の、み、ま、ま、と、ん、き、ま、や、葉、の、ま  
澤、州

か、ま、ら、け、の、み、ま、ま、と、ん、き、ま、や、葉、の、ま  
芦、夕

か、ま、ら、け、の、み、ま、ま、と、ん、き、ま、や、葉、の、ま  
加、生

か、ま、ら、け、の、み、ま、ま、と、ん、き、ま、や、葉、の、ま  
路、通

か、ま、ら、け、の、み、ま、ま、と、ん、き、ま、や、葉、の、ま  
初、冬

か、ま、ら、け、の、み、ま、ま、と、ん、き、ま、や、葉、の、ま  
京、ち、る、人、お、や、き、け、る

か、ま、ら、け、の、み、ま、ま、と、ん、き、ま、や、葉、の、ま  
あ、め、ら、の、ま、ま、と、ん、き、ま、や、葉、の、ま  
尚、白

か、ま、ら、け、の、み、ま、ま、と、ん、き、ま、や、葉、の、ま  
一、巻、す、ま、ら、ふ、ま、ら、ふ、ま、ら、ふ



ちりちりきいおのひせぬこの夕 湯水

万句真汐ふ 苔兮

尺五りきふ人のやうに時白水 苔兮

人を結うくる日午 落柱

とねも積雪をとう尺五の時白水 炊玉

釣鐘の下降の尺五をくれの中よ 筆心

激し雪をうり兼着る時白水 為兮

風に二日の月結ふをうける 一髪

一葉の柿此葉皆ふ葉より 同

木の葉をくくぬを樹を圍燈裏に 同

枇杷のむ人おのむく本陰りな 同

此句ニテ風ノ荷兮ト異名ヲ取り  
風ハ和字ナリ

古本ノ意ハ書損ナリ

葉のむもかの泣きよ尺五の 李晨

梨のむもききよぬれを 燈水

菘のむのりうり尺五や 昌若

麦のむてまの葉よ果し 同

のとけーや麦やうけの衣 一井

踏ものをたみてあさる火煙 荻松

石臼の破てきーや石詰の花 胡及

ましくも木紙ををぬえ物 文解

あふした釣籠より葱 卜枝

を板の風の休もちうき 洞雲

蓬池のかさちもえゆる 一髪



中ノ帝ニテツリ鷹ノ頭ヲカク  
又物ナリ

和名抄ニ言俗用大根ニ字

鷹居スエて石きつまるく枯野外  
風よ吹くはれり鷹は中  
鷹野の路よひきく草うぬ

寒月

煙を出て度く日そ而らき  
あさ清のち松あらふ月夜外

仲冬

おろしや鐘なるなる雪うぬ  
志う波とつまらぬる雪うぬ  
挿るるる雪うぬる雪うぬ  
柴の戸をほくちよむ雪うぬ

松芳

香尾

蕉竺

野水

俊以

津島

勝吉

津島

重治

林斧

杏雨

棟ヲ和俗ニ梅檀ト呼

雪舟ツリ雪車ナト見えタリ  
以木ハ後ヲ楚タキナリ

い〜ける柴をあらきと霞うぬ  
雪のちせんとのちうぬぬ  
水極の菜うぬぬ氷うぬ  
深き池氷は叶よ歌きりり  
片きやて松葉挿るる雪うぬ  
打をうと何れぬとき雪うぬ

兼題雪舟

峠より雪舟乗あらは汐木外  
ぬつくと雪舟よ雪うぬはく外  
松をあらき雪舟ふ雪うぬぬ外  
る雪舟より雪舟ぬぬぬ外

宗之

杜國

勝吉

俊似

除忌

長舟

嵐彈

為守

長切

一井



魁ノ種類甚多シ

釜ノ赤ミツク火トヒスト云

雪舟引や体むもあまき居る  
 此けうておくも言母のまや結外  
 吉海や羽ら黒鴨もあか——ら  
 毎ふた、火よりあつちる街うを  
 新鮮をんもあつちる心友子を  
 井とぬる者ら六月さく米つくをこ  
 ちを裸きり  
 汗出して谷も突あむ水空外  
 海氣揚の壺埋め重き砂空外  
 炭竈の穴ぬきくやら為らう  
 孫等と修く免と出るをこ外  
 火と汗して米らうちりぬを松

魚洞 含占 忠知 龜洞 村後 冬松 利重 龜洞 塩車 一突

樂天間居賦ニ間居而後倚此柱

餅花餅搗時其如ヲ柳枝  
ケ花ノ形ヲナス

翁ト越人同道ニテ元祿元年埃  
捨月見紀行有  
本名ヲ折浮世の人トシヤケハ  
の字アリハ折浮世ニテ雨ノ贈リシ  
ヤ又越人カ玉産ニセシヤ  
和名抄抄

いつけり一底起さしそつとそ  
 そ籠はゆくとくそそんはら  
 歳暮  
 餅つそね田よもきん酒とらふ  
 吾書てよめぬものちりそ書  
 餅そのははすけそちりぬ  
 ちりそく指法とせる菜畑森  
 煤拂い梅よさけくる瓢ころぬ  
 本名の日久そあつちる人のまけよそ  
 抄の字いりおくちる年のそ書まそ  
 ちりそくさりそあまそ

魚洞 塩下 忠白 野水 龜洞 一突 花字











同珠并 暑月云 上畧

暑の鳥も 涼水 キタリ 涼水 キタリ 涼水 キタリ  
暑月貧家何 所有客来唯贈北  
窓風

同珠十 大抵云 上畧 古本抵ヲ  
底ニ作ル

涼水 キタリ 涼水 キタリ 涼水 キタリ  
大抵四時心總苦 就中斷腸是  
秋天

同珠十 夜来秋雨後云 下畧 古  
本凡兩ニ作ル 書檢カ

雪の縁 キタリ 夜来秋雨後 秋氣颯然新  
秋の月 キタリ 遅鐘鼓初長夜

同珠十 長恨歌ニ遅く鐘鼓云云  
朗詠ニ鐘漏ニ作ル

耿耿星河欲曙天

同卷十 殘燈云云 上下畧 古本錯  
乱リ 不文ニヨリ 改開誤カ

ひ キタリ 殘燈影閃牆 斜月光穿牖  
少 キタリ 萬物秋霜能壞色

同珠十 万物云 壞色四時冬日最  
潤年上下畧 古本壞ヲ懷ニ作ル

ら キタリ 十月江南天氣好 可憐冬景似  
春華

同珠二十月云 霜葉未褪華  
草日暖初乾 漢沙古本ニ  
華ヲ美ニ書損ス

同珠 南窓背燈坐 風霞閣  
紗 キタリ 寂寞云云

こ キタリ 寂寞深村夜 殘鷹雪中聞  
白頭夜禮佛名經

同珠十 香火一爐燈一盞 白頭  
云云 下畧



一条禅閣無良公文明十三年  
夢去職人盡歌合ヲ撰ヒ玉フ  
法撰述ノ善數十部ナリ

鑑字未詳

玉簪草

蓬髮

佛名の禮は獨標く白髮外

禪閣の從ひのきし臨ひもささる

みささる

鋸鑷目立

舟泉

かけらふのうらみよまつらふ

付木突

五月雪水竹てもまじし人のあ

釣瓶繩打

うきさや海のこもる秋の里

糊賣

おとぎのきこしうらむつてもかこ

馬糞搔

いかにのねを糸たよらねえそ

李夫人

魂在何許一香煙引到林火香屢

かけらふのねつけはらりるもくね

越人

楊貴妃

雲鬢半偏新睡覺花冠不整

下堂来

とも丸ふ常ゆるもる條影うね

上陽人

小頭鞋履窄衣裳青黛點眉眉

白氏文集卷四及魂香降夫人  
魂夫人之魂在何許香煙引到  
林火香屢何苦不須更上  
畧古今香字脱

同卷十長恨歌攬衣推枕起  
徘徊珠箔銀屏遷迤邐雲  
髻云云上下畧古今来字脱

同卷小頭鞋履云云  
天室末年時世粧上陽人苦  
最多上下畧古今上ヲ昭ニ書ス  
今改



細<sup>シ</sup>長<sup>キ</sup>外<sup>ニ</sup>人<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>ル</sup>見<sup>ル</sup>應<sup>ニ</sup>笑<sup>フ</sup>  
物<sup>ヲ</sup>を<sup>テ</sup>笑<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>む<sup>ク</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ハ</sup>女<sup>ノ</sup>侍<sup>ヲ</sup>を<sup>テ</sup>ん

西施

宮中拾得娥眉斧不<sup>レ</sup>獻<sup>ス</sup>吾君是<sup>レ</sup>愛<sup>ス</sup>君<sup>ヲ</sup>

花<sup>ヲ</sup>を<sup>テ</sup>く<sup>ク</sup>ら<sup>ク</sup>桂<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>く<sup>ク</sup>牡<sup>ノ</sup>舟<sup>ノ</sup>を<sup>テ</sup>ん

王昭君

玉貌風沙勝<sup>ニ</sup>畫<sup>ニ</sup>圖<sup>ニ</sup>

よ<sup>ク</sup>の<sup>ハ</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>も</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>れ</sup>ぬ<sup>そ</sup>の<sup>ハ</sup>柳<sup>ノ</sup>森

一日苗<sup>ヲ</sup>を<sup>テ</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>る<sup>る</sup>侍<sup>リ</sup>て

外

祢<sup>ノ</sup>也<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>歌<sup>ハ</sup>は<sup>ハ</sup>佛<sup>ノ</sup>位<sup>ニ</sup>を<sup>テ</sup>く<sup>ク</sup>公<sup>ノ</sup>を<sup>テ</sup>ん

錫雲

錦<sup>ノ</sup>繡<sup>ノ</sup>段<sup>ノ</sup> 范<sup>ノ</sup>蠡<sup>ノ</sup> 呂<sup>ノ</sup>仲<sup>ノ</sup>見<sup>ル</sup>  
一<sup>ノ</sup>戰<sup>ノ</sup>成<sup>ノ</sup>切<sup>ノ</sup>早<sup>ノ</sup>制<sup>ノ</sup>身<sup>ノ</sup>釣<sup>ノ</sup>草<sup>ノ</sup>輕<sup>ノ</sup>  
動<sup>ノ</sup>五<sup>ノ</sup>湖<sup>ノ</sup>雲<sup>ノ</sup>宮<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>云<sup>ク</sup>

同<sup>ノ</sup>集<sup>ノ</sup> 明<sup>ノ</sup>妃<sup>ノ</sup>曲<sup>ノ</sup>僧<sup>ノ</sup>李<sup>ノ</sup>璋<sup>ノ</sup>  
玉<sup>ノ</sup>貌<sup>ノ</sup>風<sup>ノ</sup>沙<sup>ノ</sup>勝<sup>ニ</sup>画<sup>ニ</sup>圖<sup>ニ</sup>琵琶<sup>ノ</sup>  
難<sup>ノ</sup>寫<sup>ノ</sup>信<sup>ノ</sup>思<sup>ノ</sup>跡<sup>ノ</sup>宮<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>咫<sup>ノ</sup>尺<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>  
十<sup>ノ</sup>里<sup>ノ</sup> 況<sup>ノ</sup>復<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>今<sup>ノ</sup>萬<sup>ノ</sup>里<sup>ノ</sup>餘<sup>ノ</sup>

佛<sup>ノ</sup>供<sup>ノ</sup>ハ<sup>ニ</sup>向<sup>ス</sup>宗<sup>ノ</sup>佛<sup>ノ</sup>餉<sup>ノ</sup>リ

辰

杜<sup>ノ</sup>若<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>ん<sup>ハ</sup>陰<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>あ<sup>ら</sup>る<sup>日<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>水</sup>

巳

講<sup>ノ</sup>沃<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>戦<sup>ノ</sup>よ<sup>つ</sup>ふ<sup>病<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>南</sup>

午

あ<sup>ら</sup>り<sup>の</sup>よ<sup>と</sup>監<sup>ノ</sup>于<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>を<sup>テ</sup>踏<sup>ク</sup>は<sup>も</sup>

未

標<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>書<sup>ノ</sup>工<sup>ノ</sup>武<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>の<sup>ハ</sup>ク<sup>ノ</sup>合<sup>ノ</sup>を<sup>テ</sup>ん<sup>なり</sup>

申

五<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>や<sup>ハ</sup>終<sup>ノ</sup>と<sup>す</sup>る<sup>る</sup>を<sup>テ</sup>終<sup>ノ</sup>作<sup>リ</sup>

以<sup>テ</sup>よ<sup>つ</sup>り<sup>て</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>を<sup>テ</sup>終<sup>ノ</sup>作<sup>リ</sup>



山獸

鹿笛のよきをきくおそきよ 樹水

野鳥

鳴突のりかけたるふらりぬ 火竹

里虫

枝ちうらむむままり 蜀漆の 會帖

海魚

おもしうゝ 鱸引く 魚の月 今

川魚

秋の香精川くわ火ふり 今

牛馬甲足是謂天落馬首穿牛

火振ハ松明ノ光リニ魚ヲ伺テ取  
「ナリ」  
莊子秋水篇曰何謂天何謂以  
北海若曰牛馬云云

鼻是謂人

一方を掩きく枕の礎本らな 越人

同太宗師ノ篇語ナリ案矣字ヲ  
脱有ノ字析ス

榮螺子

莊子駘盜篇絶聖云云 擲玉毀  
珠小盜不起

古文後集古硯銘ニ非鈍者壽而  
銳者夭乎

からちうらむ 所をのちうらむ 之

絶聖 棄知大盜乃止

鈍者天

かむらく ぬをふりのいむ 火奉 桂夕

鈍者壽

魯氏の言をきく 市山







作ルハ紀伊ナリ同名ユエモト  
云リ

一本ニ賣クニ作ル非ナリ

近江

同國

鳥羽ハ山城

一もと名ニ京みてむつキ  
了友の武彦の國よとて  
佐々木角田門をさしとさ  
ひはれハすうてト河をアリ

美濃國美濃の山寺又友の  
嘆くるを欠て吹くふとや

芳野出て布子賣をり又友

妻よりや内外もなれた契のそと

五月も又吹れぬものやまの櫓

湖の水もさうりたり五月も

牛もそり鳥羽のほろりの五月も

角田川みて

つきの本れ嘆結の能く又友を

みよりのいづくも秋も貝のおと

十の板もすく更科の羽くを

杜國

重五

芭蕉

去来

一翫

貞室

破笠

芭蕉

夕月也林水ちふる角田川

九月十三夜

座をふ富をあらもふの月も尺を

鳴突の言やうも鳥羽田うぬ

むき一野やいふも尺を寸自

湖を屋ねうら尺を寸村うぬ

南原やうゆり合さこ初うぬ

むき一野をたふと尺を寸日新うぬ

免つてこ生海流を燃やもう尺

をされのいさう轆轤や山笠のおく

越人

素直

胡及

淡支

舟車

尙白

伊豫 随友

洗悪

津島 俊似

一笑

不尺ト十三夜ハ本朝ノ景物  
トナリ

山城

尾州海東郡ノ地名ナリ

和名抄ニウヤコハ録ナリ

山城ノ名所







翁下越人の送別カ

多徳ヨリ桂捨ノ月ニ極マ  
時ノ吟也

狩野家画工ノ曲物ニツケ  
筆洗ト云

おどろくもささ秋のかけきよ 舟水

雪もねよはをねよふえぬやそ 嵐彦

ささしきまはれんまむひ

更級の月を二人に足し花をり 若今

越入松まきまきしきめてまきりしきり

月より恨差つるよるのうへ 那水

おろし程らおろしつ果の本智の秋 芭蕉

樹の葉はさきもあけり秋の庵 政通

狩野楠とふもの其角をいわけ

よおろしとさ

狩野楠と庵をいわけよ秋の山 若今

ちの千子ノ誤ナシイ勢  
記ノ二共アリ

東海禅寺ノ後山ニリ巨石ニ  
以テ墓表トス

とらりり 福さう唄もあうらとら ちよ

八月今忘るし初まうらうら 玄察

結さけハ歌のあまうのきぬさうら 一井

品川とて人分るるさ

浮庵の養をうらこれの秋の養 文解

字枕たもさきり秋のあや 芭蕉

端をぬ刀うがめやわ村しとね 津島 若今

鳴海とてさき燕子よさきさ

いさ養をそれ程神もおろしひす 若今

夢より久しお織ハ秋の入まらり 那水

其角とぬるし時



天童山三ノ西上人船頭ニ打レテ改事  
西行一代記又本朝歴史ニ有リ

阿多くくひりまきり冬ノゆゆ  
了就るもかれなき二重の暮  
かた瓦もも見えり子なき  
里人のくくうひりなり 一重

越人と吉田の御よて

さき中こと二人旅をたあもりき  
旅をて見しや浮きの標もいひ  
同 芭蕉

述懐

ときを控へ出る時

きゆる時ハ水も清くも 一重  
子なきくくうせり田を打 一重  
同 味堂

聖

玉葉集山名のかみり  
まきけに父のつとをいふ  
とをいふ行基  
和名抄ニ歌謡ニ  
アリス

余の田の植へぬも浮き  
同 芭蕉

高野あり

おをよなきを死りり夏ノ流  
横もそりりくくうを食ひ  
同 杜園

高野あり

父母の志まきり一重  
阿やまきり新まきりのはそり  
さきふ入向きまきり 一重  
同 芭蕉

一本のなきも御よてい  
肩衣を涙子よてゆき世衣の友  
同 杏白

小舎一やら舞子初く麻木  
同 杉風

亀洞



雞見腸

三洲伊良古崎社園カ巻ナリ  
コレトカリテ書クノ字ナレト  
余情ニ結フ格ナリ

廿四孝ニ曾參鬻指痛ヤリ  
曾子從神尼在楚而心動擘而  
問母母思爾鬻指云云

和名抄ニ奴僕

九月十日素寒の事ナリ

かろ水やまの葉のゆゑに 鶏見腸

ころり 赤をむさむる葉の地種分 兎窟

人の心もなつて 色蒸

されどそわれなき件の一書の内 社園

旧里の人よしのはなは 誠人

らかしの葉をまよる少ゆいれ 西武

強念建ちもふさうし 芭蕉

若葉茶のくちははれぬもたのふたれ 越人

ある人のまもりたしやとくまを葉  
紙一筋おくるかな

魚

あつちの火母云暖甫正字温

やろ尋常ノ白ニ憚ニ三度  
格ナリ

一有妻ハタのめナリ

あつちの火母云暖甫正字温 考号

古のりる思ひ出さる 嵐孫

あつちの火母云暖甫正字温 左木

楯の穴に親をまよる 西武

目やをまよる 芭蕉

古のりる思ひ出さる 越人

あつちの火母云暖甫正字温 陳風

若葉茶のくちははれぬもたのふたれ 越人

りるや親をまよる 越人

あつちの火母云暖甫正字温 伊勢 一有妻



子規の南時對別、悲三アリト云

福川百首むろし一尺一妹の垣  
松ハ世々より流るる交りの  
すまひのこゝろにて  
長恨歌面頭一笑百媚生六宮  
云

きぬのや余のきりょうもおとくきん	除風
ぬき出て辱れよとるあまこいぬ	長和
虫平のぬきまきららうらぬ	文淵
むし干し小袖をそへる女このま	冬女
そくけいぬし妹の垣松ハ世々より	心棘
六宮粉黛無顔色	
平賀の福妻消きや月の歌	長和
一見より人約のぬきをとりぬ	尚白
きぬのきりぬ	
つぎのりよあまのれし女郎心	尚白
志りぬきよあまのれし女郎心	小春

越人妻妾の羈まつらぬれいま  
一とてあふ契約せし時アリト  
云

衣こたり男女重子置し衣別  
ニ取分ツ云

守武 天文六年八月廿日卒  
雜談集ニ此句釋世ニ非ス只觀  
想ノ吟ナリト

禅語ニ生死事大無常迅速

妻のなほ河を流しぬし神送り	越人
松の中志くく旅のよかりし	俊似
あふまひの火を吹ていぢぢぢ	舟の
うゝゝあま子巨燵流るゝあまうらぬ	岩の
山相小菊おもはせぬ	松の
あまのきをきんよとてとりぬ	冬松
おそろぬきぬぬのこみ新をき	昌松
無常	
末娘小	
あまのきをきんよとてとりぬ	守武
無常迅速	



咲つたつ際よりききーの畠下 傘下

未だ

ちゆやと共多く其時のそとを以 塚 元順

松坂の浮敷より人の方より

あふふつむやうも

橋のかきり 虫とぬをうや 為今

子のうふかきり 追善ふ 京 玄牙

あふふつむやうも 追善ふ 為今

あふふつむやうも 追善ふ 為今

あふふつむやうも 追善ふ 為今

古今集よりききり 橋のま  
をかけいむうーの人の袖  
とみ  
妹ハ千子ナリ

コ群ハ江戸ノ人ナリ元禄元七月廿日  
歿花摘集ニ追悼年回ホノ句ア

山城貴船ノ下小町カ墓ナリ

死出ノ里入り

あふふつむやうも 追善ふ 為今

辞世

あふふつむやうも 追善ふ 為今

あふふつむやうも 追善ふ 為今

あふふつむやうも 追善ふ 為今

あふふつむやうも 追善ふ 為今

あふふつむやうも 追善ふ 為今

あふふつむやうも 追善ふ 為今

あふふつむやうも 追善ふ 為今

あふふつむやうも 追善ふ 為今

あふふつむやうも 追善ふ 為今



神皇正統記やまゝついでにやみし  
去来

コトをさきりー後

その人新羅きーちりー秋の暮  
五角

母よおくれなる子の心を

たをちりふやひさし飯くら秋の暮  
尚る

ある人の追ふ者よ

埋火もあやや泪の意ニあふと  
芭蕉

秘して方まうりはるる金

沫をうらまぬくちよ清またり  
岸弾

加賀  
少長

冬辺の光りも多分の冬の日  
曠野集卷之八

釋教

伊勢少

神皇正統記おひもかけ次涅槃像  
芭蕉

原をみる母おらーちり福をん像  
嵐孫

西行上人ある茶屋よ

まらきりうらまぬくちよ清またり  
若兮

おちりー茶屋よ

連朝やその守りの日と志るねたり  
胡及

うが首み棒のまかたる仁まそ  
松翁

木履をく借も何たりるのむ  
杜園

つう福をんをくむのち  
冬松

金葉集二神皇のあつらひも  
つとやうなまうりもおもひもか  
けぬらうのむらう  
上人の建久元年二月十六日卒  
五百年忌元禄二年

其まはるるの歌ニヨリ

仁王の左ヲ蜜迹金剛右ヲ那羅  
延ト云



五元集三日輪寺の傍と蓮花の  
切つてふふ長くしてふふア  
リ

慈恵大師の元三大師ノ一也法華  
八講一日二卷ヲ講スル事也

序品 天雨曼陀羅華云々

むろ海作とも作ん 塩 者 其角

貞享戌辰の歳誕生一日

東照宮の別當僧正の法房に慈恵

大師 近府執事法華八講の傍

より一考さるるなり神妙なるて

序品の心を

あまのちのちむくく 一 越人

女房の神妙なるて法華なるれ

真くくを所あり 竜女成佛のや

おきてまうの阿一其 鼻かむおの

まなれを

詞書より發句迄法華撰婆  
達多品ノ意ヲトレリ  
へいのふハ草ノ名

讃州

ふんえハ不便カ

江蘇ハ禅ノ洞家ニ夏ノ修行ナリ

白重表裏白堂平指史ナリ  
時著之

おろくくとるくちまややるのむ 同

観音の尾上のたのむ 後似

古ちやつるまぬ待の莖草 一井

ハ島中

海士のふ醒ほむ 伊豫 千回

咲くくくふふくく 一井

友山や木蔭くくの 燕葉

なまふて

階佛の日はけれふ麻のま 芭蕉

階仏のそはけ 尚白

言わく



十如是相性體力作因緣果報本  
未究竟等下

大乘經中ニ此語多シ

おぢりハ金會ニ暮ハカテモ  
ルキニサキ煉花ナリ  
石籠ハ地籠ナリ

獨<sup>トキ</sup>の石像をありの庵山<sup>トキ</sup>の  
味<sup>トキ</sup>より一日の清水<sup>トキ</sup>水<sup>トキ</sup>

十如是

おま<sup>トキ</sup>少<sup>トキ</sup>う<sup>トキ</sup>ち<sup>トキ</sup>を<sup>トキ</sup>る<sup>トキ</sup>る<sup>トキ</sup>清水<sup>トキ</sup>う<sup>トキ</sup>南<sup>トキ</sup>

即身成佛

友<sup>トキ</sup>が<sup>トキ</sup>け<sup>トキ</sup>の<sup>トキ</sup>昼<sup>トキ</sup>寐<sup>トキ</sup>ハ<sup>トキ</sup>あ<sup>トキ</sup>の<sup>トキ</sup>佛<sup>トキ</sup>う<sup>トキ</sup>れ

不<sup>トキ</sup>と<sup>トキ</sup>ら<sup>トキ</sup>い<sup>トキ</sup>や<sup>トキ</sup>佛<sup>トキ</sup>の<sup>トキ</sup>體<sup>トキ</sup>を<sup>トキ</sup>る<sup>トキ</sup>友<sup>トキ</sup>と<sup>トキ</sup>ら<sup>トキ</sup>も

お<sup>トキ</sup>ま<sup>トキ</sup>ら<sup>トキ</sup>く<sup>トキ</sup>や<sup>トキ</sup>門<sup>トキ</sup>も<sup>トキ</sup>て<sup>トキ</sup>あ<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>く<sup>トキ</sup>施<sup>トキ</sup>餘<sup>トキ</sup>鬼<sup>トキ</sup>柳<sup>トキ</sup>

お<sup>トキ</sup>ぢ<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>の<sup>トキ</sup>火<sup>トキ</sup>を<sup>トキ</sup>と<sup>トキ</sup>る<sup>トキ</sup>即<sup>トキ</sup>の<sup>トキ</sup>か<sup>トキ</sup>を<sup>トキ</sup>し<sup>トキ</sup>き<sup>トキ</sup>い

石<sup>トキ</sup>籠<sup>トキ</sup>ハ<sup>トキ</sup>施<sup>トキ</sup>餘<sup>トキ</sup>鬼<sup>トキ</sup>の<sup>トキ</sup>柳<sup>トキ</sup>う<sup>トキ</sup>が<sup>トキ</sup>れ<sup>トキ</sup>水<sup>トキ</sup>

魂<sup>トキ</sup>を<sup>トキ</sup>う<sup>トキ</sup>み<sup>トキ</sup>より<sup>トキ</sup>海<sup>トキ</sup>を<sup>トキ</sup>と<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>向<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>

加賀 一音 一笑

岩分

悪蓋

嵐障

岩分

探丸

文里

重洞

魂<sup>トキ</sup>を<sup>トキ</sup>う<sup>トキ</sup>み<sup>トキ</sup>より<sup>トキ</sup>海<sup>トキ</sup>を<sup>トキ</sup>と<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>向<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>

掬<sup>トキ</sup>結<sup>トキ</sup>の<sup>トキ</sup>を<sup>トキ</sup>う<sup>トキ</sup>み<sup>トキ</sup>より<sup>トキ</sup>海<sup>トキ</sup>を<sup>トキ</sup>と<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>向<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>

平等施一切

掬<sup>トキ</sup>結<sup>トキ</sup>ふ<sup>トキ</sup>も<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>人<sup>トキ</sup>を<sup>トキ</sup>と<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>の<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>

稿<sup>トキ</sup>書<sup>トキ</sup>よ<sup>トキ</sup>ち<sup>トキ</sup>佛<sup>トキ</sup>を<sup>トキ</sup>と<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>の<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>

地<sup>トキ</sup>獄<sup>トキ</sup>ハ<sup>トキ</sup>引<sup>トキ</sup>導<sup>トキ</sup>歌<sup>トキ</sup>く<sup>トキ</sup>と<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>の<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>

何<sup>トキ</sup>も<sup>トキ</sup>人<sup>トキ</sup>四<sup>トキ</sup>時<sup>トキ</sup>の<sup>トキ</sup>景<sup>トキ</sup>物<sup>トキ</sup>を<sup>トキ</sup>と<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>の<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>

鷲<sup>トキ</sup>を<sup>トキ</sup>と<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>の<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>

鳥<sup>トキ</sup>も<sup>トキ</sup>石<sup>トキ</sup>籠<sup>トキ</sup>を<sup>トキ</sup>と<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>

石<sup>トキ</sup>籠<sup>トキ</sup>ハ<sup>トキ</sup>施<sup>トキ</sup>餘<sup>トキ</sup>鬼<sup>トキ</sup>の<sup>トキ</sup>柳<sup>トキ</sup>う<sup>トキ</sup>が<sup>トキ</sup>れ<sup>トキ</sup>水<sup>トキ</sup>

何<sup>トキ</sup>も<sup>トキ</sup>人<sup>トキ</sup>四<sup>トキ</sup>時<sup>トキ</sup>の<sup>トキ</sup>景<sup>トキ</sup>物<sup>トキ</sup>を<sup>トキ</sup>と<sup>トキ</sup>り<sup>トキ</sup>

回向文 願以此功德平等施  
一切々

四時景物ハ定家卿十二月花  
鳥ノ内ニ水雞ノ鷲有ニニル  
カ古本ヲハ鷲ノ書損カ



二六十四  
二六十五  
二六十六  
二六十七  
二六十八  
二六十九  
二七十  
二七十一  
二七十二  
二七十三  
二七十四  
二七十五  
二七十六  
二七十七  
二七十八  
二七十九  
二八十  
二八十一  
二八十二  
二八十三  
二八十四  
二八十五  
二八十六  
二八十七  
二八十八  
二八十九  
二九十  
二九十一  
二九十二  
二九十三  
二九十四  
二九十五  
二九十六  
二九十七  
二九十八  
二九十九  
三〇〇

松葉谷日蓮上人四年龍  
レニ能ニ

其角

一井

ト技

人のとふ所てまおん

龍彈

越人

為守

同

暖や伽藍のせ名

同

千鶴扶桑隱逸傳ニ出リ  
五元集ニ大津ノ駅ノ前書アリ馬  
も多ク一ヤレハ鼓詠ナリ  
藥王品法華經ニアリ

儼兩

雷打やかゝるニ玉の片腕 俊

作りニあてこるるれもど 一井

能寐もる人めさけりや鈍多き 文淵

千載もるもかせり一年のこれ 其角

藥王品七句

如寒者得火

まららみ稿の暖くら南ノ風 胡及

如裸者得衣

雪の日や酒樽持ふ阿才の赤

如商人得主

双六のおよみむつりう素



大角豆

如子得母

休立ておけいとうらくきげん

如渡得船

月の以隣の板成より

如病得醫

かまく時清水足なる山道に

如暗得燈

秋の夜やおどゆる可ふ夜き

神祇

古堂やまげけかふる獅子以

二月廿五日在約不

約雷

万葉二協字鏡二情怖

まきらまや廿四日の月の梅

若分

志んくま梅あうかふる庭大

円

曇も水あふく東よ神の梅

龜洞

上下結まゝあやうし神の梅

昌碧

灯のあまのこりり梅の中

約雷

いとあゝもる免はさし梅を

裁人

免をたかくあたまさかす神の梅

舟安

月影も志んくま梅の露

雨桐

門阿そ梅の鶴籠をらみり

幸三

陰る人あはのきんくま

玄察

若くまを歯系かきり見る社

鈍可







明白

法華はふさふさのむかしを  
かきとて迎へはるやこのむ 王仁

夕代の秋中田のよきしきり 景 目

あきり かくれなき人 今やつら守

先を視一樹をくらりのそこむり 芭蕉

曠野集負外

誰を思ふにきりし 終る中まありて

朝のけをきりし 我在田原の葦原

在て是の心こねをころろとんよつて

依川田をきりし 山をぬきしとて

哥をきりし 又

妻をきりし 知れぬとやうれぬ

はの屋端の船水子の他をきり 芭蕉

傳へしをきりし 小さくふさいふ

田原へ 居を移りし 今もは向をきり

むし 阿やうありきり 人の中よ 虎

文選二天台山ヲ四明ト云日本ニ  
敷山ヲ四明ニ比ス東四明ハ東嶺出  
カリ

永井信濃守家臣佐川田喜六  
員俊 寛永年間ノ人也  
昔々山花の影の影の  
かきとて迎へはるやこのむ

虎と草花小学致知類下り

員外



古詩三巴東三峽猿声悲猿鳴三  
声淚沾衣  
杜甫秋興詩三夔府孤城落日  
斜每依北斗望京華聽猿空下  
三声淚奉使虛隨八月槎下界

花よみふれぬ原ハナノハラ  
一八清テヨムナリ

古本録、書損字典ニ槓形如實

の物語をうらな虚は追ねる人ありて  
猶なきを愛ししものゆへに猿をうつて  
望まざるにたうの涙をいへるも冥の  
字を杜のころもさや如猿をたう  
をさるるにて

素平

まをさるるにまをぬぬ原をふし  
らの文人はうつうとさげらぬを  
三人并きいへるも如して

野水

かきとて山一の流実  
槓の跡もまをらふまのしめを

荷兮

和名抄ニ粗糲以發和米煎作  
今、オ、シ、リ

唐うら山ハ原ヲ五山ト云ナリ

祭

大原千白興行ヲ云

もの静けさるあふし米うり  
門の石月結雲のやまういふ  
風の目利き初秋の雲  
武士の禪うら山も同ことゆへ  
志をもふつて流のつらるる  
儀をうり原うら山の子のうへ  
づぶらうらねるるもさるる  
まをらうらねるるもさるる  
ふうらうらねるるもさるる  
娘さるる一手槓も 咲結り  
あつらうらねるるもさるる

水 人 号 水 人 号 水 人 号 水 人 号 水 人 号



利根川水源上野ニシテ関東ノ大河ナリ

井ノコ 玄猪ナリ和名抄ニ豚ノ子也

源氏若菜ノ巻柏木右衛門ノ古事ナリユリ字ニケ所打越ニナリ寛宥三ノ

高の身は泥のやうなる物おもひ  
秋をたふすく盗人の事  
ゆるやう西も東も鐘のたう  
空よりたうたる利根の川舟  
冬の日はたうくくそかま曇り  
豚子よりりと羽織うちをて  
ぶらうくときのおれ巾の輪  
狐つきまや人の足ららん  
柏木の結糸のたうつくくと  
やうやくるの塔すえらる  
月のかけより合ふたり辻お撲

人 字 水 人 字 水 人 字 水 人 字 水

歩糲ハ二人若ト鴉ナリ  
万作ハ豊臣秀次小性ノ事ハ  
將軍譜ニ見ユナリ

カヘトリ 漂取ナリ

秋よなまきりり 里の海桶  
露にれ歩糲よ出る雲うけそ  
う糲と志りぬる破のまの記  
かゝるる 諫は涙をぬまらし  
火若のそねてまのあつきこ  
かゝるるのんをよと人のまら  
水せきとるる池のかんどう  
むさうり熱もいず 空らん  
拵をきりる 木加拵 ちう  
墨を免い 正月こゝに 忘れ  
大根をきりて 干ふまら

水 字 人 水 字 人 水 字 人 水 字 人











木ノ端ナリ

火麻ノ竹取物語ニナリ  
神異記ニ火麻取其毛織為  
布

狭衣ニ船鳥井ノ君威儀師  
ニ奪れぬ一而影ナリ

けふも又もの指をんやとまひら  
るゝあはく一羽の年終木のこ  
火麻の皮の衣をまらふも  
涙をまらふとくちあひつ、  
高きより一羽をまらふ  
酒の一半ふ指をんやとまひら  
幾年を指をんやとまひら  
よりやと双銭の陰をせんまら  
けふも又もの指をんやとまひら  
月の影や飛を井の  
灯もよをぬらひてまの風

文 茅 泉 兮 茅 兮 文 茅 泉 兮 文 茅 泉 兮

隆長ハ文祿中ノ小唄ナリ  
被日蓮宗僧坂鑑ニナリ  
船唄ナリ

美濃國

窮

法華經ニナリ

数珠くりにかけし狼息のうへ  
隆長も八齒のうへ志日か  
十日のうへをりまらふく  
山里の秋をうへと生簞  
長指をんやとまひら  
さふくを指をんやとまひら  
るのうへをいふまらふく  
沸くをいふ井のうへをいふ  
遠くをうへをうへをうへ  
つらくと指をんやとまひら  
咲くく提提品よむ

茅 文 兮 泉 兮 文 茅 泉 兮 文 茅 泉 兮







天山夢ハ中古ノ俗字ナリ  
和名抄ニ和天夢時珍云其  
芽可食

開ナリ

あつー淨瑠璃ハ 薩ノ淨雲  
ナリ流カ

紗一帯又鯉一  
月の影寄若きいそん  
足咲りうとらうしめし  
天仙夢ふ夜食あはし  
かけつひうけて夜陸の中  
多くんとあうて若物うちあう  
クセをーき海つらてやる  
弱のやどあは信濃ふ甲斐  
秋のあふふむー淨瑠璃  
めくくくもよそふよそし生身魂  
いの月のあはよとるやう

水 全 水 全 水 全 水 全 水 全

住ニ住フト活ク詞ナレト原本ニ  
通俗ニシタカフ

山の隈ふ松と楸とのかけらなる  
あつきもあつきよららくとす  
あまきらや夜うけをうり引結の  
た鼓もあまきよ踏子のあまり  
こらうとあまきよ本質の子枕  
あまきよのうををあまきよか  
思ふもあまきよぬれも一二年  
庭をつけて住居かたりぬ  
三方の救むつらとあまらふ  
供養の子鞋をなす掃こ  
脛くや山姥たあまきよのそ

水 全 水 全 水 全 水 全 水 全



人おひまりしきの川字

草

夫木集ニ夜の花のまじりて  
くすむ月をふりよりの  
わよくしらんとも又

誦

泉本團 和名抄團扇 古文ニ  
仇扇如團月

自き一の物さけきい管の若き  
もましくぬるおもらきふ振を  
きくともよき團扇を  
澄法ののむをまへど出さる夜  
の花の病をいふまらふそらたや  
おまらふまぬ

月子柄をきく一あふいれ團扇  
板のきくともくうの夜の花の病  
とくくを産をうそらふらく

越人  
傘下

檜ノ柱ナリ 瘡ナリ  
輕キ持病ハ表ニイマサルヤ

啞方

眉

おまひかけ形を風吹のそら  
高木柱つうおまらふよりから  
使の者よ返るうやうくす  
阿れさくと指の子をえらまらふ  
年あくるやそ阿らうこたり  
とてやふよのあはきをあまの  
おまもさけふ泣をいふま  
大勢のふま法書をいふま  
月のうふ釣瓶 踊るう  
喰材も又ふふ林も皆  
秋のうまの細なるもの

人 同 下 人 同 下 兼 同 人 同



源氏細流正月より正月迄二  
月半の間にその中の歌を採り  
七月より十二月迄三月半の  
間にその中の歌を採り

井蛙抄ニ顯照ハ独鈷を持寂  
連ハ鎌首とてて歌論セリ  
六百番方合ノ時ナリ

灯  
燈ノ俗字

あはれよらうはせをまむくつき  
森をこらちちま字のゆるむた  
むのちよここくうゆるる涙るら  
若りのくぬのこしきまきつせ  
打むねて浦の苔居の砂干尺上  
肉こそむりて 於田ゆる大  
破さめの水ぬ飲をきけをぬや  
もくまらつこのゆるるもの階出  
歌何ぞせ指針強首まあさる  
中々 歌まの階ちつゝのり  
灯臺の油らるゝと押かゝ

同 下 同 人 同 下 同 人 同 下 同

詩幽風ニ九月叔苴トウ麻子マシナリ  
誤字カ原本草書ノ苴ニ苴ニ相似  
タリ 諸説紛々

信濃ノ地名

百万ハ謡曲ニアリ

花ノ春ヲ花ノ跡生ト取ナシテノ  
揚句ナラニ

白をおこせハきうくく けを死  
吹風よめるのころまのふらくと  
半ハハこまは 葉山の秋  
むらくと月らんる魚の銀は燈  
人の清ふハあつことも形  
よきりくく瓜や道やを首の込  
干さるる冬のころふ 町中  
おらくくを山法の中の屋町分  
皆同 春ふ ナ ずん急 佛  
百万もくくふあふむの春  
田楽きれて様淋しき

人 下 人 下 人 下 人 同 下 同 人



声の如くいざなうとてや歎息す  
諸説紛然万葉二十枚草  
二層の如くいざなうとてや  
これなりトアリ  
和名抄ニ蘭蕙ノ二字フチハカマ  
トヨリ今建蘭ニラス

五石ノ歌ノ一トサコ集ニ注セリ

白氏文集卷十二長安古未名  
利地空手無金行路難  
らるゝハ狂ニナリホトハト通  
音

深川の東

原うねもたつる子母ハからはまや  
酒高のちうらふらの月の月  
友族誰家屋ふれつらん  
理をもぬれくも秋の夕暮  
瓢箪の大きき五石もかりこ  
風よ吹れりゆる市一人  
何事も長安ハ是名利の地  
医の多きこそ目くらむれ  
いそぎと神走のやととと

越人

芭蕉

全

越人

全

芭蕉

全

越人

蕉

玄蕃ハ掌諸番事并僧尼  
度縁事一相當位五位上  
足駄とらせぬ向前向ノ音ナリト  
後ニ祖翁全ヘリト为并抄ニアリ

物磯臭キナリ

連やま聖の深辺少約とて  
はらの言和のをもるるを  
頼政

塵

ひらりき活やく寺の流とり  
此里ふ古きまき高のりをつと  
足跡をかきぬるの阿けのの  
まぬくや阿よりかをそく阿やふ  
風ひきもまふなるのうら  
手もつらげ屋の信縁もまふまぬ  
ののつらきまき毎路ちうらり  
月をむはまの言和をわら  
て存在まつるころの永ぬき  
破戸の新おけるまきの末  
とせハやひりまの挽割

人

蕉

人

蕉

人

蕉

人

蕉

全

蕉







原本唯書損  
齒 和名抄ニ波賀美

眼 又 一カ奈布太

東鑑六三 文治二年三月一日豫  
州妻静及母儀 禅師自京来  
鎌倉下略

二人静トイフ 諺ニ女ニ静カヌ  
ノツキテ初ニ人静一テ殊  
サレユトアリ

二モ。阿。お。ち。ち。の。う。る。ま。を  
作。也。ト。アリ。奇。疾。方。九。人。自  
覺。本。形。作。内。人。並。行。並。卧  
不。弁。真。假。者。離。魂。病。也

煩ト讀来トイハツキノ上界カ  
イカニマカ葉ニ煩トマリナマニ  
同  
原本熟ニ誤字古詩ニ醉後

能て己をさく葉ハ水ヲサケル  
霞ノ下ニ裾ヲカケル 夏衣  
齒キキテシキク 曉ノリ初  
娘ニシテ涙ヲサケルニヤウテ  
静由前ノ多ク静ヲモテモモ  
志操ノ離魂ノ煩ノおもろキ  
阿キキテシキク 比る金ニ万支  
いよわしキニ我他命も名付  
やけとちしとんしつとさりぬ  
酒熱き身ふつとさるるさめを  
魚をもつぬ月の江能弁

角 全 人 全 角 全 人 全 角 全 人

耳執トアリ 私語ハサヤキト也  
そのまの富士ハ須弥山ノ一轉カ  
新勅撰賀ケルニヤキト也  
ハ袖マツテミルニヤキト也  
ももトシテミルニヤキト也

平家ニ西王母トシテ一人も昔  
ハアツテ今ハナリ 東方朔  
トシテものも名をのミヤ  
テ目ノシタレ又列仙傳ニ卷  
トヤハヨシマヨノ意ナリ朗詠  
言語巧偷鸚鵡言  
無情

そのまの富士ハ須弥山ノ一轉カ  
かとせしめる 一の瓶  
鏡ニシテ袖マツテミル  
くきせふつけて飛ぬ人ハ扶  
西王母東方朔も目ハ足レ  
トヤハ鸚鵡ノ舌のみトシテ  
アツテ今ハナリ 東方朔  
志ノ秋ももきふおろし  
や、思ハナリ 秋ノ花ヲ打外  
米ツケル所ニシテ  
夕鳥ホの長き小版のつら

全 角 全 人 全 角 全 人 全 角 全 人



兎輩ノ賭ノ遊

不形様ハ伊勢白子駅ニ下リ

念者法師ハ男色ニ

和名抄鳥蒜 胡葱  
沖續ノ濱尾張ナリ築出島  
居崎ヨリ笠寺村迎リマテ  
云トリ

いづらの筆をそめふ 強カ  
穴のちよま 登りちまひ 子枕  
ひくはなわさうて 何勢のハ節  
浦月あふ路 極をちまうめを  
念者法師ハ 秋の阿きかせ  
夕まふれまうさうを 袂衣巻者  
弓まふらむら 実阿げの窓  
乃もくくふ 気食の籠を 垣ゆいそ  
ものまきくうぬるまの 籠  
むのまふま 阿きくを 籠  
むらうぬへき 無 疎の者  
全 全 人 全 全 全 人 全 全 人

我ノ不醜ナリ

脊面トモタ 家ノ後ノ事ニ

うらまきト思ニまはれノのち  
あふまふら ぬるうらま  
もまら

あまらド新酒ハ人の醒やまを  
秋うそまう いらも 湯 婦  
月ノ和書ま引ちまふ 中ふな  
かふ面まのま けま け  
ま 経 阿 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
川 越 ぬ ぬ ぬ 下 の ぬ  
癩 瘡 ぬ の 透 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
唱 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
潤 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
後 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
越 全 全 全 全 全 全 全 全 全 人







卯ノ價ヲモツテモ元祿頃ノ時  
世オモヒヤルヘシ  
ヤハ拍子ナリ

旅よりうらちのこころを憂ふ  
言ふと玉子をちやりのあまも一文又  
下戸ハ皆しく月のあきらけ  
耳や齒やまじりもむねを  
具足なきをたれぬかの知年  
いやはいも常々ぬはやく小  
山伏はてしなくうらたけ  
くまのどろろぬけぬ米車  
柳打るるをたれぬとこれ  
何をも泣かし髪を振おぬ  
志らくもものもぬつぬを

水 極 水 極 水 極 水 極 水 極

蓮道行幸ノ道筋ニ延ラ  
まナリ

三ツガキ  
瑞籬

大和

ちんかといやうなるを  
かゝる舟中を館移り  
る止て雪のちきり  
柳ちるかと例の道  
軒ちるく月ををいれ  
寂しき秋を女夫  
占をくもふ  
泰めてもやれ  
お毎の午魚ゆる  
澄よりおを  
まをのくらかり

水 極 水 極 水 極 水 極 水 極







扛秤

終ノ義ニ非ス俗ノ突ナリ非ニハ  
此ツイタマシ

御行状ニ詞物語ル井多シ

をりしはさうもさういふを洗ひ  
せむ程何れ故屋を釣りり  
木狭小ハナ明りし松の枝  
秤ハカリよかろ人くり無  
は手よかりてヤイト灸の程もたを  
おくらもせんよつのお探ひる月  
暮るこて障子のかけのうささき  
らさうもやうふまはむお秋の葉  
は名秋入さのさのまをたう  
お引かぶるんぬはさる  
毒ちうりと瓜一切も喰ぬ人

秤井扛及秤井及秤井

鴨トウ鷄キル

斤シ斤シもたうて ころら ぶハる  
板屋きく婚ふちうき庭の内  
と袴のぬけくる軍ツをク度クぬ  
ぬくクとや脚ツのクさぬク念ク墨  
尺シさクさクさクとクりクさクつクしク

及秤井及

七五







翁曰花見の句のからむをかし  
得々轉々を考へるべし

鞆皮又鞆 鞆ハ俗字カ  
司召ハ月土日諸官入ニ爵  
祿ヲ賜フ

拙ハ和字ナリ 和名拙ニ功程  
式ニ出ヤリ

信濃國諏方

俗謂人身丈尺稱脊此字也

花見

木のこもよ汁も鱈も様々の那  
西ののとかよよききとそまを  
旅人の風かまひりまを  
もきもあひぬ古刀の鞆  
月結く仮の白雲の目  
粉白つくる拙うをやくを  
鞍も三歳の秋のあて  
えはきぬくま降参るる  
入込上諏訪の涌向の夕暮  
中めもせいの高お山伏

硯 水 硯 水 硯 水 硯 水 硯 水 硯 水 硯 水 硯 水

伊勢地名

身田同国高田派本山

万葉ニ密トモリ目サシ  
堀川百首ニうつをいふる  
のあまのあまのあま

いさぎを唯一方に  
細き舟より急つり  
物おもふ身は物忘れ  
月尺の影の袖おとせ  
秋風の船をこゆる波  
舟りかきや白子も  
子部讀むの巻りの  
吹禮死ぬる月のかけら  
何よも蝶の現を表す  
又ちわいの力さすま  
羅よりいさぎをいさ

硯 水 硯 水 硯 水 硯 水 硯 水 硯 水 硯 水 硯 水



花山院之面影ニヤ元享釈書  
見エタリ  
万葉ニ朝茂吉紀関守の手  
東弓トリ紀関ハ紀州和泉  
ノ境ナリ

カッテ  
カハ却テ  
隠逸傳増ノ翁ナトノ面カケ  
ニヤ

然那をききと泣ぬひたり  
子来弓紀の舞ちり 頑カッテ不  
海をくけくくくくくくくく  
双の目を歌くくくくくく  
飯の持佛はむくくくく  
中くくくくくくくくくく  
あふくくくくくくくくく  
情れくくくくくくくく  
月をくくくくくくくく  
む為らくくくくくくく  
唯四方なるま鹿の鹿

水 頑 翁 水 頑 翁 水 頑 翁

花ノ字三句去リ  
句引ハ冬ノ日春ノ日荒野ニ集  
ニナシ 瓢集ノ下原本ニ在リ  
三六六  
翁十二 瓊頑十三 水十二

古本ニ名もさきらハ目を見  
一ぬく有モアリテ立條ニ條  
の意味をくくくくくく  
あふくくくくくくく  
面

一葉の鏡むらかきと西  
醫者の茶を飲ぬ分  
松ふくくくくくく  
いろくくくくくく  
うもれくくくくくく  
福福のまふくくくく  
かすのくくくくくく  
は茶種くくくくくく  
秋をくくくくくく

水 翁 水 頑 翁 水 頑 翁  
水 翁 水 頑 翁 水 頑 翁  
水 翁 水 頑 翁 水 頑 翁  
水 翁 水 頑 翁 水 頑 翁



元禄以松の系トイヘル冊子  
中ハ六何ト噴出ス一フシヨ  
ナリ

庄野 伊勢

和日トナ

秋のき言も秋のき語のり  
こもくふたももくふた  
うつるもりの物織を首より  
小あうもら一布のあし  
籠釣のちんさくあゆる川の  
高佛すそをむむらうも  
うらう一葉もうけ年の暮  
庄那の里あ犬よおとされ  
旅安雅き人の廻つた  
あはらういよ自におる夜  
汐のさす縁のふすむわら

全 全 全 全 全 全 全 全 全 全

蕎麦温鈍附一奇

李<sup>スモ</sup>

櫻殿経ニエナリ

生鯛あがる浦のきうり  
は村の唐きよの醫者のちうり  
そらむんおけいものきうり  
かきうらきよの退屋まき  
うら泣かぬ海の碓き  
あこのめやる秋のノをき  
蕎麦まきらふ山の胸中  
うどんうりりのえられの舟の  
まもりおりの皆裸む  
あししやの調意くそま  
文珠のちもあも祭特う

全 越人 全 全 全 全 全 全 全 全 全 全



枕草紙ニあせの意すゆ  
かゝるくさきぬのこしきと  
引こるをそとあり

孫碩九翁一路通ハ  
荷兮十越介

小家集ニけをむるゆまの  
小貝ひらふとくまのの深六  
いふよ如のうらし又後旅  
集梅りあよまふまふま  
枋の小貝外判口

原本おとてと見エトモ  
おそまの書損方異本ニ入  
もくをニ作ル 慶三ヤ

ちりか減又とハ出来トハは  
何ともせぬよ なる物 柳  
志のふれのをあしうちうて笑也  
逢より氣をたぬおれりて  
汗のふれがえて心をさし  
あきりるるちうちうけて  
むさかり又る人のほろろ  
まハねともおもひさる 松

鉄炮のをとまふの 外月分

城下

野徑

人字今人今字今

砂の小麦の癒てをりく  
西風よまふわの小貝拾をせ  
まのぬる一ハ 餅モラのう移り  
其名いさうの二人をけるる  
秋の暮書ッおのの 静  
女房を心細きまおををれ  
目の中におさくアをからちる  
りやま又川原のをよく受え  
顔のをかき生れつき  
まふあふれりまをうらやま  
一里こぞり山の 下刈

里東 泥土 乙女 怒気 弥次 筆 野徑 東 土 海 産



新古今集ニ寂莫の苔の岩  
石の去つるきよなるみ  
るのやぬりそぬる

一本ニ繰書損

博奕

尺知らずとて岩屋よ是もぬらぬ  
それ世を泪ると時るこ  
聖舟よあはれ越の遊女のささる  
を歩又つとくく下るの跡  
月かよ座をきて言ふふせ  
羨深の地所かきき早蕨  
あはれきよついても都忘れ  
半葉遠の坊主泣出ん  
春より居酒の荒の一深  
古きをよちの結るかきくら  
時くいはれ姓も鳥帽も

土 東 経 州 破 車 経 州 破 車 経 州 破 車

関下龜山ノ間ニ大岡寺跡手  
アリナハナリ  
硬ハ痛ムナリ用ハ要所ニ  
カサ  
荒寒ナリ夜着ツ祈リ  
草庭ハト翁ノ句冬ナリ  
部ニ出又花屋日記ニ關取  
菜め一たり夜知のれト  
アリ世ハ秋向冬ナル  
咳氣ハ風邪ヲ云フ玉勝問  
ニ見エ

碓氷を足舞ふ世の  
黄昏の如き雲の泣やん  
連もカも皆座次こ  
から風の太閤に吹透  
碓氷のこもよ用叶  
糊剥き萩もちんさ  
夕辺の月よ菜食臭出寸  
看所の味よまき  
四十ハ老のくらく  
髪くぜよ秋の露を  
碓氷を細目まけ

土 東 経 州 破 車 経 州 破 車 経 州 破 車











利休子氏仕豊臣家領三平  
右天正十八年没

ゆり字三句てけり

古今集ニ秋風よほまろいぬ  
ら一畚袴つれをそよき  
ふくん

源氏流者名をノ面影ナラシ

月影より利休の姿を鼻よりかけ  
度く草をもちたるもく  
虫を踏つてれくと鳴るらん  
りそくくのみ夜もつぬる  
折言文をももるもふれ路は  
なみとくごらり侍の侍  
涙磨ハヤと物も自由なる  
狐の忍る弓かりよやる  
月影る所をの雲の銀河  
望理み居くも後もまをん  
いぬとく大強者もたふれり

全 破 秀 破 秀 破 秀 破 秀 破 全

石の山の頂ニ法りせむの鐘  
の聲やまておとろくも  
トウートアリ

禅門の男子剃髪録ナリ

藤ニテ撥丸窓ナリ

去きや東鑑ニ時直

福なるも鐘録に記るる  
江戸海をも嘆度と為りけり  
阿の山の山頂に鐘の相  
そ在り阿の山頂に鐘の相  
火を吹て居る禪門の祖父  
本堂にまき荒壁のまら祖  
羅陵の袂にあり孫の女  
歯を痛む人の歯を画して  
為るそとたもすくを瘻をり  
藤垣の言に残燭を狭おき  
口之果ぬいさやりの時直

全 秀 破 秀 破 秀 破 秀 破 全



今八熊本ニ作ル

實ハ偽字

原吃書損

菜  
入ニテ色ノ濃ヲ云リ

句引思

七部集中翁トシテ書ルハ此集  
ニ其前カ集ニ始テ公卿ト書  
猿蓑撰ノ時翁曰我ヲ翁ト書  
尤可憚必書コト勿レトノ玉  
滅後尊称ニテ翁ト書スハ苦  
シカラサルニ

昔々よ小判かきふる華袴  
秋入初る肥後の隈本  
幾日故も言て身なる後名船  
素布子可あきくりり  
次山よりめくると叱らねて  
鳴あけけとも猫をゆらけ  
子祝山中人町のよぬのり  
や一回の概木の芽萌え  
おぬまよ雪誘引する音あり  
おぬまのり誘ひもゆる陽矣

秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩



